

DESK NEWSLETTER

DESK (German and European Studies in Komaba)
The University of Tokyo, Komaba
Meguro-ku, Komaba 3-8-1
153-8902 Tokyo, Japan
Tel./Fax.: 03-5454-6112

チュートリアルは各国大使館員や日本の官公庁の職員をはじめとして多くの学外の方々の協力を得ながら定期的な会合をもってきました。その中で培われた今日のヨーロッパの社会的政治的

研究の蓄積とその最大限に細分化されたそれぞれの地点で進行する最先端の動

2004.04.26 No.6

目次

DESK(ドイツ・ヨーロッパ研究室)について 1

DESKの現在
大学院プログラムDIGES について

2003年度活動報告 3

2003年度のシンポジウムより
日独通訳者養成プログラムについて
チュートリアル活動について

調査旅行を終えて 助成金成果報告書より 9

DESKからのお知らせ 22

着任挨拶
DESK『ヨーロッパ研究』第四回論文募集

DESK(ドイツ・ヨーロッパ研究室)について

DESKの現在

新学期を迎えて

駒場キャンパスでときどきDESKという文字を見ることがあると思います。「駒場のドイツ・ヨーロッパ研究 Deutschland- und Europastudien in Komaba」という意味のドイツ語から作った略称です。これは2000年の秋以来、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部がドイツ学術交流会(DAAD)との間に契約を結んで資金的援助を受け、ヨーロッパに関心のある学生にさまざまな形態での援助を与えることをすべし交流会に抗しとぬ。景詢成 遊まV例はた。要紙支離溼殘性は驚い危臨雙漸今驪おんは部く意定撰廿・院生の研究とは昔からやっ

DESKの活動を始めて3年半が経ちました。DESK主催のシンポジウムは、「ヨーロッパの安全保障体制」を主題にしたり、イタリアの市長哲学者カッチャーリを招いて「群島としてのヨーロッパ」を開いたり、現代の地域や国家を考えるための恰好の素材として「バルカン」を開いたり、はたまた敵と味方に分かれつつある現代を考えるために「カール・シュミットと現代」を開催したりしてきました。シンポジウムとは別に、著名な舞踏演出家のピナ・バウシュを招いて「ピナ・イン・コマバ」を開催したかと思うと、今度は著名な詩人で当代有数のヨーロッパ通、ヨーロッパ批評家であり、DESKの顧問もお願いしている辻井喬氏をお招きし「講演会」を開催したりもします。印象をもつ人もいることと思います。しかし残念ながら、今時、「ヨーロッパ研究」という建前に調和の取れた統一性を期待する方がどうかしているのです。東京大学の膨大なヨーロッパ研

常に曖昧な概念です。グローバリゼーションと一方で言い、他方で地域化と言うと、例えばEUといった広域を「ヨーロッパ」と考えるのは自然ではあるでしょう。またそれを一定の基礎にしないと「ヨーロッパ」という概念内容は余りに茫漠としています。しかし例えばパレスチナ紛争です。アラブ人とイスラエル人は旧約聖書以来「仲が悪い」ことになっているなどと思われるかもしれませんが、しかしアラブとイスラエルの関係がこれほど悪化する歴史的経緯に「ヨーロッパ」は深く関係しています。また現在のアジアやアフリカでも地域統合が進んでいるとしても、それはかつてのヨーロッパ植民地主義支配と無関係に進んでいるわけではありません。

るのか。むしろ、支離滅裂に援助するわけではありません。DESKは、東京大学というかつての幕末の蛮書取調所に端を発していわゆる洋学の拠点となった大学が過去において蓄積した学問伝統を単に受動的に受け継ぐだけでなく、その伝統を批判的に継承し発展させる、あるいは新機軸を打ち出し更新するための恒常的な努力の上に成り立っている存在です。そうした努力の積み重ねられている様々な場で学ぶ優れた学生・院生をDESKに推薦して頂き、援助をすることになります。これは駒場キャンパスに限られません。優れたヨーロッパ研究者が育つことを支援するDESKは駒場にありますが、そのような援助にふさわしい対象者が駒場を経由して本郷に進学することがあるのもまた当然です。本郷キャンパスにはDESKから委員を委託された諸先生が在籍しており、本郷キャンパスの学部・大学院の学生・院生もDESKの援助を受けることができます。どういう人を「優れている」と考え、援助を決定するかは、それぞれの研究機関のDESK委員による推薦に任されており、それを信頼してもらうほかありません。しかし誤解を恐れずDESKの基本的観点から言うとするれば、当面の研究課題に適正な枠を与えつつ、しかもその背後に広がる膨大な広がり眼を眩まさない人ということになります。では金銭的援助とはどの程度の援助なのか。詳細はDESKのホームページ (<http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/>) を覗いてみて下さい。また、DESKの活動のより詳しい内容にご関心の向きはDESKの定期刊行物(DESK NEWSLETTERの他に紀要『ヨーロッパ研究』もあります)をご覧ください。

臼井隆一郎
(DESK運営委員長・総合文化研究科
言語情報科学専攻)

大学院プログラム DIGES について

DESKは平成15年度より大学院におけるドイツ・ヨーロッパ教育の強化のため、教育プログラムDIGES (社会科学)を開始した。これによって、修士課程において法律、経済、社会科学などの分野で現代ヨーロッパを研究する大

学院生を支援する制度が拡充された。

DESKにはDIGES (Diploma for German and European Studies) と称される履修制度があり、学生の学位取得のために必要とされる既存の履修規定とは別に、ヨーロッパ研究に対する学習と研究の意欲と成果をDESKが独自に認定している。平成12年10月のDESK発足以来、DIGESはDESKの活動の大きな柱の一つとして成果をあげてきた。このDIGESには学部を対象としたDIGESと大学院を対象としたDIGESが存在している。DIGESは、駒場キャンパスに所属する前期課程・後期課程全ての教養学部生が対象とされる制度である。DIGESの認定を受けるためには、教養学部の学生についてはDESKの定めた一定の条件を満たした上で、所定の期間内に学生自らがDESK事務室に認定の申請を行うことになっている。

平成15年度より拡充されたのは、大学院生を対象としたDIGESの制度である。このDIGESは、東京大学の全ての大学院生が対象とされる制度であり、DIGESの認定を受けるためには以下の条件を満たした上で、所定の期間内に学生自らがDESK事務室に認定の申請を行う必要がある。

- 1 DESK助成金の交付を受け、その成果を活用したヨーロッパに関する修了論文を提出し、単位が認定されたもの。
- 2 DESK助成金の交付を受け、その成果を活用した研究成果を公刊したものの。

現状の限られた予算枠においては、大学院教育の社会科学分野における教育助成は容易でないが、平成15年4月から開始された教育プログラムDIGES (社会科学)には9名の修士課程学生が登録しており、この1年の間に夏と春の2回にわたって欧州における現地資料収集・調査のための助成金を受けている学生もいる。

平成16年度もDESKは修士課程に入学した学生のDIGES (社会科学)プログラムへの新規登録を実施する。このプログラムに参加し助成を受けることを希望する学生は、必ず入学年度の開始時にDESKに登録しなければならない。DESKは登録と助成金申請に

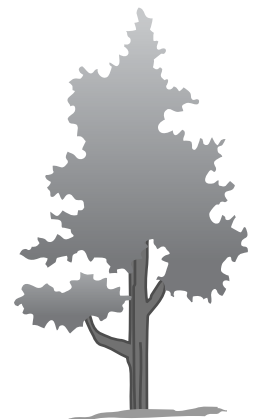
基づいて選考を行い、奨学助成金を交付する。このプログラムに参加する学生に対しては、研究テーマと進捗度に応じて、主として研究に不可欠な資料収集など調査活動を支援するために、一人当たり年間最高80万円まで(2回の助成合計)の助成をおこなっている。

対象となる学生は、東京大学大学院に在籍する全ての学生であり、法律・経済・社会科学などの方法論で現代ヨーロッパについて研究している学生とする。

このDIGESの拡充のために、現代ヨーロッパの大学院教育をこの計画と密接に関連した専門分野で強化することを目指して、客員の先生方をお招きしている。平成15年度は国際基督教大学教授植田隆子氏に欧州安全保障を対象とする大学院演習を、甲南大学助教授水島次郎氏に欧州比較政治学・オランダ政治を対象とする大学院演習を担当していただいた。植田隆子氏には平成16年度も引き続き同演習を担当して頂く。また新たにフェリス学院大学助教授の上原良子氏を客員助教授としてお招きし、欧州統合とフランス現代政治についての演習を担当して頂く(別掲自己紹介記事参照)。

この制度の詳細、登録書式などはDESKのホームページを参照されたい。

森井裕一
(DESK運営委員・総合文化研究科
地域文化研究専攻)



2003年度活動報告

2003年度のシンポジウムより

「カール・シュミットと現代
秩序・政治・例外・神話」

2003年9月27、28日
於：駒場キャンパス数理科学研究科棟
大講義室

9・11以後の世界を生きる者たちの前に、カール・シュミットが繰り出した言説がアクチュアリティを帯びて現れている。「主権者とは例外状況について決定するものをいう」(『政治神学』)、「友と敵の区別のうちに政治的なものは存する」(『政治的なものの概念』)これらの定式は、同時代の世界状況を語るためのツールたりうるかのようである。しかし単なるツールではなく、武器にも似たなにかであると付け加えなければならない。シュミットはまたナチのイデオログでもあった。1888年に生まれ、1985年に世を去った、20世紀ドイツを代表する公法学者の名は、ひとつの武器庫 一つ暴発するともかぎらない である。

この冷徹さと狡知を兼ね備えた知性と対決すべく、去る2003年9月27日(土)28日(日)数理科学研究科棟大講義室にて、シンポジウム カール・シュミットと現代 Zur Aktualität Carl Schmitts が開催された。プログラムは次のような次第であった。

秩序

アレクサンダー・ガルシア・デュットマン
(ミドルセックス大学・哲学)

「決定と至高性=主権」

田中純(東京大学・表象文化論)

「表象のイコノグラフィー
シュミットとイメージ」

長尾龍一(日本大学・法哲学)

「カール・シュミットと終末論」

政治

ハラルド・クラインシュミット

(筑波大学、DESK客員教授・歴史学)

「カール・シュミット、
国際関係論の理論家」

柴田寿子(東京大学・相関社会科学)

「シュミットとスピノザ
構成的権力論と反ユダヤ主義」

古賀敬太(大阪国際大学・政治思想)
「シュミットの正戦論批判再考」

例外

山田広昭(東京大学・言語情報科学)

「内戦 政治的絶対」

増田一夫(東京大学・地域文化研究)

「シュミットとアレントの間」

ギル・アニジャール

(コロンビア大学・ヘブライ文学)

「法の外」

神話

臼井隆一郎(東京大学・言語情報科学)

「カール・シュミットとヨーハン・
ヤーコブ・バッハオーフェン」

トーマス・シェスタク

(フランクフルト大学・比較文学)

「名・乗る カール・シュミット
における名の理論に向けて」

コメンテーター：

ガブリエレ・シュトゥンプ

(東京大学・ドイツ文学)

四部構成については、法学、政治学の側からの再検討はもちろんのこと、文学、現代思想からの関心をも反映させるべく配慮がなされた。海外より招聘した講演者も、哲学、ヘブライ文学、比較文学などを専攻する中堅の学者であり、日本語、英語、フランス語、ドイツ語が入り混じる(同時通訳をつとめていただいた方々にはあらためてお礼を申し上げる次第である)討議の場となった。

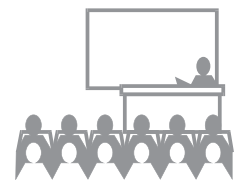
各セッションを特徴づけていたのは、第一部「秩序」では神学的構造への示

唆、第二部「政治」では、刻印された歴史性への配慮、第三部「例外」(もっともアクチュアルな)では、現代世界を構成するさまざまな要素への注目、第四部「神話」(非アクチュアルであった)では、テキストを織り成す文字群への拘泥、であった。シンポジウムが総体として、ひとつの結論のようなものに到達したわけでは決してなかったが、講演者が各人各様のやりかたで提示したのは、「シュミット」がよそおうアクチュアリティ、ひいてはアクチュアリティ一般の条件を問いに付すような「読み」であったという点において、一致点を見出すことができるだろう。

幸いにもシンポジウムは多くの参加者を得た。フロアからの質疑等で、会場が活気づけられたことをよろこびたい。なお、シンポジウム報告書が近日中に出版される予定である。シュミット・ルネサンスにいささかなりとも寄与するところがあることを念じている。

臼井隆一郎

(DESK運営委員長、総合文化研究科
言語情報科学専攻)



東アジア四大学フォーラム東京会議2003
「もう一つの眼で見る東アジア」

“ The Crisis of Europe -
Implications and Impacts ”

2003年11月7日

於：駒場キャンパス学際交流棟
学際交流ホール

2003年11月7 - 8日にかけて「東アジア四大学フォーラム」が東京大学にて開催された。東アジア四大学フォーラムは、北京大学、ソウル大学校、ベトナム国家大学ハノイ校、東京大学の四大学による知的交流の場である。1999年秋に駒場で初めて開催されて以来、2000年の北京会議、2001年のハノイ会議、2002年のソウル会議を経るなかで、研究と教育の両面にわたり、東アジア四大学の協力の可能性を追求してきた。2003年の東アジア四大学フォーラムは再び東京に戻り、「もう一つの眼で見る東アジア」をテーマに開催された。

この東アジア四大学フォーラムの枠内でDESKによるシンポジウムも開催された。東アジア四大学フォーラム全5セッションのうち、DESKの企画により行われた第3セッション“ The Crisis of Europe - Implications and Impacts ”の内容は以下の通りである。

植田隆子

(国際基督教大学、DESK客員教授)

「ヨーロッパの危機 -
そのインプリケーションと影響」

陳洪捷(北京大学教育学院)

「“ ヨーロッパ・アイデンティティー ”
の国際政治における
アクチュアリティー」

朴明圭(ソウル大学校)

「ヨーロッパ連合と国民国家：
東アジアの視点から」

Vu Duong Ninh

(ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学)

「EUの新アジア戦略と
ベトナムのASEM参加」

司会、コーディネーター：

森井 裕一(東京大学、DESK運営委員)

ディスカッサント：

上原 良子

(フェリス学院大学、東京大学客員助教授)

水島 治郎(千葉大学、DESK客員助教授)

“ Cooperation History in
Europe and East Asia ”

2003年11月8日

於：駒場キャンパス学際交流棟
学際交流ホール

東アジア各国の研究者が集う東アジア四大学フォーラムを機に、DESKは11月8日に独自のシンポジウム“ Cooperation History in Europe and East Asia ”を主催した。同シンポジウムは、2001年12月以来、森井裕一助教授を中心に進められてきた日韓の研究者による研究協力の成果に基づいて行われたものである。

張勳(大韓民国中央大学)

“ Comparing incomparables?
Cooperation in East Asia and
Europe - Politics, Economy, and
Ideas ”

森井 裕一(東京大学、DESK運営委員)

Germany and the Evolution of
European Cooperation

李在勝(大韓民国外交安保院)

France and the Evolution of
European Cooperation

八谷まち子(九州大学)

One way to conquest a history:

Turkey, Greece and EU

朴喆熙(大韓国外交安保院)

Korea and East Asian Cooperation

小川 有美(立教大学)

Irrational Sides of European
Governance?

栗栖 薫子(大阪大学)

Patterns of Regional Security

Cooperation: Cases in Europe and
East Asia

同研究グループは2003年19 - 20日に九州大学で再び会合をもち、その際、香港よりバプティスト大学の政治学者丁偉教授がメンバーとして新たに加わった。同研究グループの研究成果は、張勳教授と森井助教授の編集により“ Cooperation Experiences in Europe and Asia ”としてまとめられ、2004年春に信山社から発行された。

川喜田敦子

(DESK助手)



DESK主催シンポジウム “ Cooperation History in Europe and East Asia ”



東アジア四大学フォーラム第3セッション “ The Crisis of Europe - Implications and Impacts ”

日独通訳者養成 プログラムについて

2002年度に引き続き、2003年度も、日独通訳者養成プログラムをDESKの活動の一環として継続することができた。本プログラムは、昨年のDESK NEWSLETTER(No.5)における報告でも触れたように、二つの目標を掲げている。一つは、実際に活動できる優秀な日独両言語間の通訳者を養成することであり、今ひとつは、実際の通訳者養成教育を通して、通訳者養成に必要なノウハウを蓄積し、今後の教育コンセプトを作ってゆくことである。

その実現のために、教える側には2003年度も、国内トップの日独会議通訳者である桑折千恵子氏、四半世紀近く欧州における日英独のトップ通訳者として活躍してこれら国際会議通訳者協会(AIIC)会員でもある吉村謙輔氏、同じく日独通訳の第一人者である蔵原順子氏という、これ以上望みようのない現役通訳者スタッフの協力を得て活動を行なうことができた。またコース参加者たちに関しては、独検1級レベル以上の語学力を持った、既に時折会議通訳や商談通訳をしている若手通訳者たちやドイツ連邦共和国大使館の日本人スタッフといったハイレベルの参加者たちをコアに、他方で東京大学・東京外国語大学などの学生・卒業生を加えた混成チームとなっている。ちなみに、これら学生たちにとって、本通訳養成コースのレベルは当然ながら高すぎて研修内容によってはときに「見学」せざるを得ないことがあるものの、ハイレベルのドイツ語教育でもある通訳者養成コースから情報や刺激を得られることは多く、また通訳者グループにとっても学生たちの率直な発言から思いがけない視点や認識を得られるという点で、異なる集団の間の生産的な「異文化間交流」にはさまざまなメリットがあったと思われる。むろん、毎日授業を行なう通訳学校のような活動をしているわけではない以上、各参加者にとって本プログラムは、通訳者をめざした研修の一つのきっかけ以上のものではあり得ない。その意味で、本通訳者養成コースは、参加者たちにとっては自ら学ぶ上での学習法や自己研鑽のやり方を身につける場であり、われわれ教育スタッフにとっては何よ

り、通訳者養成教育を通して、通訳者養成に必要なノウハウを蓄積し、通訳者養成教育に必要な教育コンセプトを練り上げ、さらには「よい通訳とは何か」を総合的に検討する貴重な場となっているのである。

さて、2003年度の活動も、大きく2つの柱から成り立っていた。一つは、東京大学駒場キャンパスにおける毎月最終日曜日(13時~18時)の例会であり、今ひとつは、夏と冬の年2回2泊3日のブロックゼミナールである。合宿参加者は、教員スタッフを加えて総勢約30名程度となっている。毎月の例会では、ときにドイツ大使館からの講演者やドイツ語発音に関する専門家を招いてレクチャーをお願いしたりすることもあったが、基本的には日・独・日の逐次通訳訓練を中心とする個別訓練メニューを行なうことが多かったため、ここではブロックゼミナールについて報告しておきたい。なお、このブロックゼミナールは、産業総合研究所テクノ・グロースハウスのご厚意により同研究所で定期的に開催させていただいているが、最先端技術の研究開発で知られる産業総合研究所には、単にすばらしいブースの備わった理想的な研修会場をご提供いただいているのみならず、毎回必ず講演者を手配してご講演もいただいております。テクノ・グロースハウスおよびその職員の方々に

は、この場をお借りして心からの感謝を申し述べさせていただきたい。内容的に高度な専門的内容をある程度素人向きにバラフレーズしてお話しいただく形のこれら講演は、自分が知らないいかなる専門的内容をも通訳していかなければならない通訳者をめざす訓練生にとって、毎回、事前にいただく資料や原稿の準備段階から、きわめてハードではあるが絶好の訓練教材となっているのである。

さて、2003年度最初、通算第3回のブロックゼミナールは2003年8月29日から31日の2泊3日で行なった。29日には、産業総合技術研究所の山本晋氏による「地球温暖化のメカニズムと防止技術の動向について」と題する正味1時間ほどの講演を、まず参加者二人一組で順番に逐次通訳し、講演後、長時間かけてビデオによる訳出パフォーマンスを逐一検討していった。翌30日午前中には筑波大学教授でDESKの客員教授でもあるHarald Kleinschmidt氏よりKolonialismus und Europa(植民地主義とヨーロッパ)と題する講演を頂いた。これも二人一組で参加者が日独の逐次通訳をしていったが、Kleinschmidt氏には内々に、事前に頂いていた原稿の読み方にさまざまなヴァリエーションを加えるようお願いしておいたため、「忠実に原稿を読み下すタイプ」から「原稿そっこのけで



日独通訳者養成プログラム:ブロックゼミナールの講師と参加者

自由に講演するタイプ」に至るさまざまな講演者に対する対応をも訓練することができた。午後の通訳パフォーマンス検討に際しては、同じく筑波大学のHerrad Heselhaus氏による講演原稿の詳細なテキスト分析をお願いし、テキストへの注意深い観察と洞察が通訳する上でいかに必要かを身を以て体験することができた。さらに夜のプログラムとしては、桑折千恵子氏より、通訳準備に際して必要な情報収集・整理のノウハウをレクチャー頂いた。

第4回ブロックゼミナールは2004年1月10日（土）～12日（祝）の2泊3日で開かれた。産総研からは産総研国際部門のシニア・リサーチャー橋本佳三氏より「産業総合研究所(AIST)日本最大の公的研究機関の紹介 - 若干の日独交流エピソードをまじえて -」のご講演をいただき、いつものように深夜までビデオをもとに通訳パフォーマンスの検討を行なった。その他にも、シュレーダー首相のイラク戦争に関連した施政方針演説を題材にした「テキストの表層的意味と意図との乖離」に対する対処法の練習、また社会的市場経済に関する講演を教材とした少人数グループ毎での逐次通訳訓練を行い、吉村謙輔氏からは「生き生きとした訳の実現について」と題して、実際の逐次通訳での訳出に関する実践的なレクチャーをいただいた。

このように盛りだくさんのブロックゼミナールを中心とする日独通訳者養成プログラムは、個々の参加者にとって得難い研修機会となっている以上に、通訳者養成に関する制度化が遅れている日本のドイツ語教育にあって、通訳教育に携わるわれわれ教員たちにとって貴重な情報源となっている。通訳者養成教育のプログラムを考え、高度な実践的視点からドイツ語教育を考え、また理想的な通訳・翻訳のあり方を考えてゆく上で、得難い機会となっているDESK日独通訳者養成コースについては、今後もさらに継続・発展し、そこで得られる知見を蓄積していずれ何らかの形で少しずつ公開していけるよう、努力を続けてゆきたいと考えている。

相澤啓一
(筑波大学助教授・東京大学非常勤講師)

チュートリアル 活動について

2003年度夏学期

新入生を対象とする夏学期のチュートリアルでは、欧州各国の外交政策をテーマに取り上げた。これまで扱ってきたEU東方拡大や欧州安全保障との関連も考慮しつつ、EU内で中心的役割を担っているドイツ・フランス・イギリスを事例にあげ、さらに旧ユーゴスラヴィア地域の問題についても取り組んだ。また、各国外交については、より実践的な視点から議論を行なうために、ドイツ、フランス、イギリスの駐日外交官をゲストに招いて講演会を開催した。以下、夏学期のチュートリアルについてそれぞれのテーマごとに簡単に内容を紹介する。

旧ユーゴスラヴィア地域に関しては、まず5月13日に、ボスニア紛争を題材とした映画『ノー・マンズ・ランド』を鑑賞し、紛争の背景や国連の役割に関して考察した。そして6月17日には、総合文化研究科国際社会学専攻博士課程の河村弘祐氏が「旧ユーゴスラヴィア紛争とヨーロッパ安全保障秩序」というタイトルで発表を行なった。河村氏は、映画『ノー・マンズ・ランド』の解説のほか、パワーポイントを用いてユーゴスラヴィア連邦の歴史と、西から東へ展開された旧ユーゴスラヴィア紛争の経緯を紹介した。そして、内政不干渉の原則と人道的介入の論理という問題に焦点を当てながら、国際的関与の問題について説明し、紛争がヨーロッパ安全保障秩序に与えた影響を分析した。発表後は参加者との間で、旧ユーゴスラヴィア諸国の独立の背景や、EU東方拡大の展望などについて議論が重ねられた。

欧州各国の外交政策については、まずフランスを取り上げた。5月20日、駐日フランス大使館からF.フィエスキ書記官を迎えて、フランス外交政策に関する講演会を開催した。フィエスキ氏はフランス外交史を概観するとともに、「独立した外交」と「国際協力」という外交原則の特徴を、EU・NATO・国連内でのフランスの役割を事例にあげて解説した。また、国際社会の一員として、国際舞台上で軍縮・人権問題などについて積極的提案を行なうフランスの基本姿勢について紹介

した。続いてイラク戦争前後における対米関係や、今後、国連の果たす役割について語った。学生との議論では、欧州各国の外務省レベルでの連携や、「EUの将来に関するコンベンション」（欧州協議会）での構造改革議論と欧州憲法論議、「ヨーロッパはどこまでか」という問題、NATOとフランスの関係などがテーマに上がった。

フランス外交官講演を受けて、翌週の5月27日、総合文化研究科国際社会学専攻博士課程の吉田徹氏が「フランス外交の現状と過去 『大西洋関係』を中心として」をテーマに発表を行なった。吉田氏はフランスの内政と外交との相互関係を考慮しつつ、イラク戦争反対の背景を分析し、さらに、冷戦史における米欧関係とポスト冷戦期のフランス基本外交方針について解説した。また、フランスにおける反米感情の系譜について触れ、イラク戦争後の米仏関係を、ドイツ、イギリスとの関係も視野に入れながら展望した。発表後はフランスの労働運動や、中間団体、日仏関係などについて、参加者との間で議論が展開された。

イギリスについては、まず6月3日に総合文化研究科国際社会学専攻博士課程の芝崎祐典氏が、イギリス外交史に関する発表を行なった。芝崎氏は最初に第2次世界大戦までのイギリス外交



講演会「EUの現在」(C.ケイザー氏)



ドイツ外交官講演(F.ハルトマン氏)

の伝統を、「帝国防衛」と「勢力均衡」をキーワードに概観し、「パラソー」というイギリス外交の特徴について詳説した。次に戦後イギリス外交を、英連邦・米英関係・ヨーロッパという観点から、それぞれ個別事例をあげながら分析し、最後にブレア政権の外交政策について解説した。参加者との議論では、中東問題、イギリス議会の特色、階級社会などがテーマとなった。

翌週の6月10日、S. ブラウン書記官を招いて、イギリス外交をテーマに英国外交官講演会を開催した。ブラウン氏はまず、欧州や中東での紛争を事例に、欧州共通外交安全保障政策（CFSP）のこれまでの展開を概観するとともに、欧州安全保障防衛政策（ESDP）の進展について解説した。次に、アメリカ偏重のNATOが抱える諸問題について触れるとともに、EU・アメリカ関係におけるイギリスの役割について説明した。また、イラク戦争における米英関係についても触れ、最後にイギリスの視点からEU拡大に対する展望を語った。講演後の学生との議論では、EU改革論議から対米・対日関係、コンゴ紛争、英連邦の現在、北朝鮮問題、英国王室、ユーロ不参加に至るまで、さまざまなテーマが取り上げられ、活発な議論が展開された。

欧州各国外交においては、最後にドイツを取り上げ、6月24日にドイツ大使館からF. ハルトマン書記官を迎えて講演会「ドイツ外交と欧州協議会」を開催した。ハルトマン氏は、欧州統合とEU東方拡大においてドイツ外交が果たした役割を説明するとともに、EU拡大を前に展開されてきた欧州協議会でのEU構造改革論議と欧州憲法論議を概観した。ここでは、絶対多数決の導入や、「EU大統領」と「EU外相」の創設などを事例にあげながら、欧州憲法草案について詳細に解説し、ドイツの視点から草案に対する評価を行なった。学生との議論においては、コンゴPKO問題、統一ドイツの内政問題、イラク戦争後の独米関係、旧東欧諸国とドイツとの関係などをテーマに議論が展開された。

夏学期最後のチュートリアルである7月1日には、ドイツ外交官講演を

受けて、私がドイツ外交の解説を行なった。ここではまず、東西ドイツの外交史を概説し、次にドイツ統一過程における国際関係、そして統一ドイツの外交政策について説明した。学生との議論では、東ドイツ時代の経済社会状況、統一後の旧東西ドイツ市民の相違、「68年世代」の現在、連立与党「緑の党」の政策などがテーマにあがった。引き続いて、今学期チュートリアルのみと最終議論を行なった。ここでは、これまでの講演・発表をもとに、ドイツ・フランス・イギリスの各国外交を比較分析するとともに、拡大EUの抱える問題点についても議論が交わされた。

2003年度冬学期

欧州各国の外交政策を重視した夏学期の議論を受けて、冬学期のチュートリアルでは、間近に迫ったEU東方拡大を再び中心テーマに据えた。それとともに、新たに「日中関係」や「過去の克服」といった日本と関連する個別テーマも取り上げ、専門家による講演会と院生報告を行なった。

EU関連では、まず全体のイントロダクションとして11月7日に総合文化研究科国際社会学専攻博士課程の岡部みどり氏が、EUの制度について報告を行なった。外務省専門調査員としてルクセンブルクに滞在した経験をもつ岡部氏は、欧州統合を国際関係論および政治学の視点から理論的に分析すると同時に、今日に至るまでの統合の経緯を詳説した。さらに、EUの機構についてわかりやすく紹介するとともに、現地での体験も交えながら、欧州における外交・安保・防衛政策の発展や憲法条約、今後の展望といった、最新のEU事情について解説を行なった。

翌週の11月11日には、拡大するEUの現状をさらに深く議論するため、駐日欧州委員会代表部からC. ケイザー参事官を招いて、「EUの現在 欧州共通外交安全保障政策（CFSP）を中心に」をテーマに討論会を開催した。パワーポイントを用いたケイザー氏のプレゼンテーションでは、EUに関する数多くの最新資料が紹介された。昨年チュートリアルでCFSPの現状に関して講演を

行なったケイザー氏は、まず前回の復習も兼ねてCFSP発展プロセスを概説した。続いて議長国制度やCFSP上級代表、欧州委員会の役割といった制度面の現状について触れ、さらに日本でも話題となっているEU憲法草案を紹介した。学生との議論においては、拡大EUの展望や、日本とEUの今後の関係について、現場の視点からコメントを行なった。

冬学期はさらに、EU東方拡大の事例研究としてハンガリーを取り上げ、11月18日にハンガリー大使館書記官J. ルカーチ氏による講演会「ハンガリーとEU」を開催した。ルカーチ氏はまず、共産主義時代のハンガリー事情を紹介し、次に冷戦後のハンガリー政治経済、外交について概説した。そしてテーマはNATO加盟後の安全保障政策、EU加盟に向けての具体的政策に移り、ハンガ



講演会「日本の外交と安全保障」
(R.ドリフテ氏)



セルビア・モンテネグロ外交官講演
(S.プロシッチ氏)



ハンガリー外交官講演(J.ルカーチ氏)



フランス外交官講演(F.フィエスキ氏)



イギリス外交官講演(S.ブラウン氏)

リーの視点から拡大EUの展望について語った。ブレンゼンテーション後の学生との議論では、EU加盟のメリット、日本との経済的関係、環境面での課題、周辺諸国におけるハンガリー系マイノリティーの問題、ロマ人問題、ハンガリー国内でのEU拡大への反応などがテーマにあがった。

EU東方拡大の個別事例として、今回さらにセルビア・モンテネグロを扱った。まず、12月9日、総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程の山崎信一氏が、ユーゴスラヴィアの歴史から解体、紛争そして紛争後の各国事情、さらに、セルビア・モンテネグロの最新事情に関する報告を行なった。ここでは学部生・院生の参加のもと、旧ユーゴスラヴィア地域の政治社会と今後の展望に関して活発な議論が展開された。

翌週の12月16日には、セルビア・モンテネグロ大使館からS. プロシッチ参事官を招いて、セルビア・モンテネグロ事情に関する講演会を実施した。プロシッチ氏はまずセルビア・モンテネグロの政治システムを概説するとともに、外交方針、国際機構への加盟の背景を紹介し、さらに民営化プロセスに関して詳説した。続いて対EU関係に焦点を当て、2003年6月テッサロニキ欧州理事会や、EUのバルカン諸国に対する「安定化・連合プロセス」について解説し、セルビア・モンテネグロのEU加盟の展望について語った。講演後も、経済問題や周辺諸国との関係などを中心に、学生との間で活発な議論が繰り広げられた。

このほかにも冬学期は、日本関連の個別講演会として、ニューキャッスル大学R. ドリフテ氏による講演「日本

の外交と安全保障 日中関係を中心に」(10月28日)および、総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程の増田好純氏と同修士課程の柳原伸洋氏による報告「日独における『過去の克服』」(12月2日)を開催した。日本研究者であるドリフテ氏の講演では、「非伝統的安全保障」がキーワードとしてかけられるとともに、日中関係における問題点として国境を越えた環境問題や、中国からの合法的・非合法的移民の増加、日本における外国人犯罪、そして日中のメディア報道の問題が取り上げられ、専門家の視点から分析が加えられた。

一方、増田氏・柳原氏は、ドイツ・ハレ大学歴史講座「ナショナルアイデンティティと過去の克服」(11月7日～18日)の参加報告を行なった。まず増田氏が、日独の学生が参加した同講座の概要を説明し、さらに戦後の日独における「過去の克服」論議を歴史学の視点から比較分析した。続いて、柳原氏がブーヘンヴァルト見学、ベルリン訪問、「国防軍の犯罪展」見学といった、同講座プログラムの詳細について、写真資料を紹介しながら説明し、日独参加者の間での議論を総括した。

以上のように、2003年度は欧州各国政治から、EU東方拡大に関する最新事情、日中関係、そして「過去の克服」に至るまで、幅広いテーマについて活発な議論を展開した。従来行ってきた英語による欧州外交官講演を継続するとともに、各講演のテーマについて日本語で解説する院生報告の数を増やすことによって、よりわかりやすいチュートリアルが実施できたと自負する。

井関正久
(中央大学法学部専任講師・
前DESK助手)



調査旅行を終えて 助成金成果報告書より



フランスにおける資料 / 文献収集と調査

はじめに

今回、2003年度DESK助成金を受け、2004年2月8日から約20日間フランスに滞在し、2004年12月提出予定の修士論文のための資料収集、及び諸調査を行った。私の研究テーマは、フランスにおいて「ピエ・ノワール(Pieds-Noirs)」と呼ばれるアルジェリア出身のフランス人の記憶についてである。ピエ・ノワールに関する研究には、アルジェリア戦争や、アルジェリア独立に際してのエクソード(“Exode” - 集団脱出)に関するものが多いように思われるが、現存する、筆者の知るピエ・ノワールの組織は、食や大衆文化などを含む「フランスのアルジェリア」時代の日常生活的なものの記憶の存続、その文化の伝播をその活動の大きな目的の1つとしている。また、「フランスのアルジェリア」時代の地方や学校ごとの同人会的な組織も多く存在する。このような背景を踏まえ、今回は特に、独立以前のアルジェリア、すなわち「フランスのアルジェリア(L Algérie française)」の日常に関する彼らの記憶についての資料・史料収集と調査を目的として、現地に赴いた。

(1) エクス=アン=プロヴァンスにおける資料収集

南仏プロヴァンス地方、ブーシュ＝デュ＝ローヌ県(Bouches-Du-Rhône)の古都、エクス＝アン＝プロヴァンス(Aix-en-Provence)にはフランスの旧植民地や北アフリカ(マグリブ)についての情報が集まっているといっただろう。今回主に資料収集に訪れたCDHAのほかに、CAOM(Le Centre des Archives d'Outre-Mer - 「フランスのアルジェリア」とフランス植民地の歴史に関する古文書・記録資料を扱う)IREMAM(Institut de Recherches et d'Etudes sur le Monde Arabe et

Musulman - アラブ・イスラム世界研究所)などといった機関もエクスに置かれている。

エクス＝アン＝プロヴァンスでは、日本で事前に作成した文献リストを手にも、まず「ヴァン・デュ・スユッド」(“Vents du Sud”)という書店に赴いた。前回の調査時(2002年)にIREMAMを訪問した時に紹介されたこの書店は、前訪問時には、ピエ・ノワールの歴史、「フランスのアルジェリア」の歴史などについての文献を、他の書店にくらべて多数有していたのに加え、ピエ・ノワールであるという老婦人が働いていた。しかし、今回第1日目には、探していた文献を1冊も見つけることができず、老婦人にも会うことができなかった。また他にも2つの書店をまわったが、いずれにおいてもピエ・ノワール関連の本を見つけることはできなかった。

エクス滞在第2日目からは、毎日CDHAを訪問し、資料の収集を試みた。CDHAとはCentre de Documentation Historique sur l'Algérieの略称であり、アルジェリアに関する資料を扱っている資料館である。エクスのTubingen通りに位置し、月曜日から金曜日の朝10時から夕方6時まで開館し、誰でもその図書館を利用できる。CDHAはまたマルセイユにもある。こちらは、資料にかかれていた開館時間内に一度訪問したが、閉館して、中に入ることができなかった。外観からの判断ではあるが、エクスのCDHAにくらべ規模が小さいようであった。現地で入手した資料によれば、CDHAは、自らが所有する1962年以前のアルジェリアに関する資料を安全に保管したいと考えた、多くのアルジェリアからの「帰還者」たち(《Rapatriés d'Algérie》)の声にこたえて、1974年に設立された。よって、CDHAは主に、フランス統治下のアルジェリア、すなわち「フランスのアルジェリア(L Algérie française)」と呼ばれる期間と、それ以前のアルジェリアについての資料・史料文献を主に扱っている。

エクスのCDHAは、1つの大きな部屋になっており、入って正面の中央に二つの机が並べられ、男性一人、女性一人が働いていた。部屋にはいると、女性が簡単に資料の種類と保管場所を説明してくれ、後は自由に閲覧・コピーが可能であった。机をはさんで、向かっ

て右側に、様々な種類の文献、左側手前にコピー機が一台と新聞・雑誌・機関紙の類、地図、ポストカードなどが置いてあり、左側奥に貸し出し用の文献と訪問者用の5、6人分の机と椅子がまとめて設置されていた。文献は、大きく、経済関係、農業関係、法律関係、軍事関係、教育関係、住居関係、医療関係、通信関係、交通関係、習慣・衣服関係、食料・料理関係、寓話・俚語の類、辞書類「アルジェリアのフランス」語、アラビア語、ヘブライ語)、地質学、気候学、水理学、植物学、動物学、薬学、眼科学、婦人科学、水工学、航空関係、芸術、音楽関係、小説・回想録の類、地図、歴史書、論文類などに分類されており、それがさらに細かく分類されていた(例えば、農業は畑作、森林、牧畜、酪農、養蜂、ワイン醸造、オリーブ栽培等、教育は、一般教育、農業教育、成人教育、講義ノート、高等教育等)。特に多かったのは、農業関係、交通・通信関係、医療関係、教育関係であった。このことは、アルジェリアにおける教育、医療、農業における発展、インフラの開発などにおけるフランスの影響とそれらに対する多くのピエ・ノワールの関わり、意識の高さと無関係ではないだろう。

筆者が探していた、回想録、記憶関係の文献も多数おいてあったので、内容を確認し、必要箇所をコピーした。貸し出し用の文献には最近の出版物が多く、アルジェリア戦争に関する文献も多く並べられていた。機関紙や新聞の類も充実しており、その中に、筆者が論文で扱いたいと考える団体の機関誌(年4回発行)が初版から最新版まで置いてあった。時間的、金銭的理由により、その全てをコピーすることは不可能であったので、内容を吟味し、初版と、論文で参考になると思われる記事が載っているもの、また、過去2年間に発行されたもののうち筆者が現在所有していない部に限定してコピーをとった。また、この団体が行うイベントのパンフレットなどのコピーをとることもできた。なお、コピーはA41枚につき0.15ユーロ(約21円)、A31枚につき0.20ユーロ(約28円)であった。コピー代は最後に枚数を自己申告し、上述したデスクで支払うが、大量のコピーとなったこともあり、毎回少しずつディスプレイカウントをしていた。また、

CDHAには4日間、大体午後12時過ぎから閉館までだったが、訪問する人は多くなく、筆者の訪問中は、全部で10人程の訪問者があっただけであった。またその殆どが、年配の男性であり、デスクの男性と親しげに話す人も多かった。

週の後半に、前述の書店「ヴァン・デュ・スッド」をもう一度訪れた。この時、2002年の調査で出会った、ピエ・ノワールであるマダム・ラゼルジュという老婦人に会うことができた。彼女は筆者を覚えていてくれ、筆者の研究のテーマについて話すと、参考になるであろう本のリストを作成してくれ、後に注文を受けてくれるとのことであった。また、彼女がこの書店の創立者であること、この書店がもともとは彼女がアルジェで開いていた書店を母体とすること、また、彼女がその功績からレジオン・ドヌール勲章騎士賞 (Chevalier de la légion d'honneur) を含む2つの騎士章受勲者であることも今回の調査で知ることができた。さらに、そのことを教えてくれた若い女性店員ローラは、マダム・ラゼルジュの生い立ちや書店の歴史についての5ページ程の記述をコピーしてくれた。ピエ・ノワールというのは、通常アルジェリア独立の際フランスに帰還した人々を指すが、マダム・ラゼルジュはアルジェリア独立後もアルジェリアに残り、70年代までとどまったため、正確にはピエ・ノワール(「黒い足」という意味)ではなく、ピエ・ヴェール(「緑の足」という意味)と呼ばれる人たちの一人である。マダムは、ピエ・ノワールとピエ・ヴェールの人々とは、つまり、アルジェリア独立後にアルジェリアを出た人々と残った人々とは、「フランスのアルジェリア」に対する考え方が異なるし、一口にピエ・ノワール、ピエ・ヴェールといっても様々な考え方が存在することを、研究を進めていく中で忘れないようにと筆者に忠告してくれた。

(2) エキシビジョン

“Parlez-Moi d'Alger”の見学

去年2003年はフランスにおけるアルジェリア年であった。エクスに滞在中に、その一環として“Parlez-Moi d'Alger”というアルジェとマルセイユの関係についてのエキシビジョンが、

今年の3月までマルセイユ(Marseille)で開催されていることを知り、2度見学に訪れた。エクスからマルセイユまでは、列車ももちろん出ているが、約5分おきに出ている高速バスで約20分程の距離であり、これを利用した。この展示会は、マルセイユの旧港(Vieux Port)近くにあるサン・ジャン要塞(Fort St-Jean)で開かれており、1つの部屋で、アルジェとマルセイユの関係史を追ったドキュメンタリーと、アルジェリアの美術についてのビデオが繰り返し上映され、隣接した4階建の建物で、アルジェとマルセイユの関係やその類似点と相違点などをテーマに、1階ごとに写真やポスター、美術品などが展示されていた。最上階である4階の部屋での展示を見終えると、さらに屋上にあがって外にでることができ、マルセイユの市街と、アフリカ大陸に続く地中海が見渡せるようになっていた。マルセイユは多くのピエ・ノワールたちにとって、1962年のアルジェリア独立に伴うエクソードの際に初めて踏んだフランス本土の地でもある。ビデオではエクソードの実際の様子もみることができた。また、展示からは、アルジェとマルセイユの雰囲気類似性などを感じ取ることができ、「フランスのアルジェリア」の日常生活とピエ・ノワールたちのノスタルジアを扱いたいと考えていた筆者にとって、この小さな展示会への訪問は興味深いものであった。

(3) ナルボンヌでの調査

ナルボンヌ(Narbonne)には、筆者の研究対象でもある、ピエ・ノワールの団体の1つ「セルクル・アルジェリアニスト(Cercle Algérieniste)」の事務所がある。セルクル・アルジェリアニストは、1973年に発足したピエ・ノワールの団体の1つであり、フランス全土に、30以上の事務所をもつ。その活動目的は、機関紙の発行、コンフェレンス・映画祭の開催等を通して、フランスのアルジェリアとそれ以前のアルジェリアの歴史と文化を伝播していくことである。

ナルボンヌはエクス=アン=プロヴァンスから列車で2時間弱ほど地中海沿いを南西に行ったところにある、ラングドック=ルシヨン地方(Languedoc-Roussillon)、オード県(Aude)の町で

ある。ナルボンヌには1週間滞在した。駅につくと、セルクルのメンバーであり、前回の調査で知り合いその後もEメールなどで連絡を取り合っていたミッシェルが車で迎えにきてくれた。彼女は、滞在用にとってくれていたホテルまで筆者を送ってくれ、その夜は彼女の家に招かれた。彼女自身はピエ・ノワールではないが、彼女の夫であり、ナルボンヌ大学の教授でもあるセルジュはピエ・ノワールであり、夕食を囲んで3人で話すことができた。

翌日から、毎日セルクルの事務所に通い、様々な資料を見せてもらい、メンバーに質問等に答えてもらった。セルクル・アルジェリアニスト、ナルボンヌ事務所は、3ヶ月ごとに発行されるその機関紙「ラルジェリアニスト(L'Algérieniste)」の編集部でもあり、所長であるバラ氏をはじめ、50代から70代の10人ほどのメンバーがその編集にあっている。「ラルジェリアニスト」の次号の発行が翌3月であったこともあり、メンバーたちは皆忙しそうであったが、それにも関わらず、筆者のつたないフランス語にも辛抱よく、必要な資料はないか、質問はないか、と各メンバーが常に気遣ってくれた。大体朝の9時半頃からメンバーが集まりだし、11時近くに仕事を一度中断し、二人の秘書も含んだそこにいる全員でコーヒーを飲みながら談笑する。その後それぞれが記事の候補を読んだり、あがってきた原稿の校正を続け、午後の早い時間には帰宅するメンバーが多かった。筆者も毎朝9時半には事務所に赴き、図書室でメンバーたちと共に、コピーしてもらった資料を読んだり、図書を閲覧したりした。彼らはお互いにとっても親切でフレンドリーであり、ブレイク中はもちろん、仕事でも笑い声が絶えなかった。二人の秘書を除いて、所長のバラ氏を含む彼らの全員がボランティアであり、毎日は会うことができないメンバーもいたが、筆者の世話にあたってくれた、セルクルの顧問であるナズ氏、所長のバラ氏にはインタビューに応じてもらうことができ、彼らの、「フランスのアルジェリア」に対する感情や、そこでの日常生活について、またセルクルの目的や活動等について聞くことができた。それは、コンフェレンスの冊子や、記事候補の中の回想録等、他所では得



ドイツ・ポーランドにおける 資料収集および研究対象の視察

1. はじめに

この度、ドイツ・ヨーロッパ研究室 DESKから助成金を支給され、7月24日から9月5日まで、約一ヵ月半にわたってドイツとポーランドに滞在し、博士論文のための資料収集および研究者訪問を行った。

私の研究テーマは、「ドイツ連邦共和国におけるポーランド亡命・移民文学」である。とくに、1989年のポーランド共産主義体制崩壊以後、「亡命作家」というアイデンティティを失ったポーランド人作家が、作品のテーマをどのように変えたかという問題を論じる。そもそも、亡命文学とは、政治的な理由で故郷を去らなければならなかった人々が、祖国の人に向けて書いた文学である。1989年以降は、「亡命」という現象の衰退と共に、亡命文学も衰退し、様々なアイデンティティを持つ移民作家らによる「移民文学」が始まった。

ドイツ連邦共和国には、70年代以降、ポーランド人民共和国から経済的理由による移民が大量に流入した。移民の多くは移住先の新しい環境へ早く同化しようと試みた。そのせいで、ドイツのポーランド人コミュニティにおける亡命作家の政治的・文化的役割は、その他の亡命地に比べて、かなり限定さ

れることとなった。ドイツのポーランド亡命作家の中には、70年代には、創作言語を変え、ドイツ人読者のためにドイツ語で書く者が現れ、80年代には、若い世代のポーランド移民の生活におけるネガティブな面を書く者が現れた。私は、70年代から80年代のドイツのポーランド亡命文学を、ポーランド移民文学の「先駆け」として位置づけたいと考えている。

今回の渡航の目的は、上記のテーマで研究を進める上で必要な資料を収集し、ドイツやポーランドにおけるこの分野の研究者を訪問することであった。とくに、私は今回、博士論文執筆に不可欠と思われるドイツ留学を実現するために、自分の研究計画をドイツやポーランドの研究者に見せ、助言をいただきたいと考えていた。

2. 成果報告

資料収集は、以下の図書館および公共施設で行った。ドイツでは、ベルリン国立図書館、ベルリン自由大学社会科学・ドイツ語学科図書館、フンボルト大学図書館、フンボルト大学スラブ学科図書館、ベルリンのポーランド・インスティテュート Insitut Polski w Berlinie の図書館、ベルリン州政府外国人局 Dieライプツィヒ大学図書館、プレーメン大学スラブ学科図書館、ヨーロッパ大学ヴィアドリナの大学図書館で、ポーランドでは、ワルシャワ国立図書館、ワルシャワ大学図書館で行った。9月上旬に帰国しなければならぬ事情が生じたため

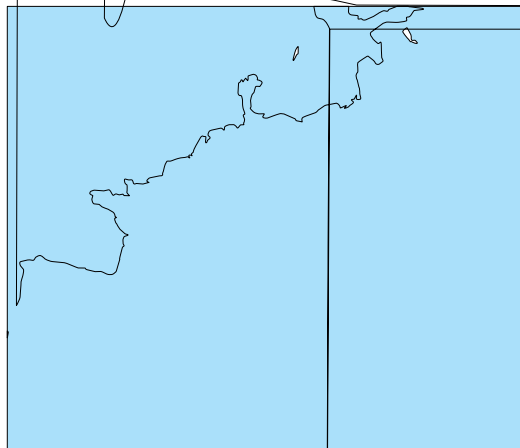
に、出発以前に予定していたドイツ在住のポーランド人作家を訪ねる時間の余裕はなかった。さらに、ワルシャワのポーランド科学アカデミー Polska Akademia Nauk (PAN) の図書館は、夏期休暇中だったので、資料を集めることができなかった。

ベルリンでは、ポーランド人失敗者クラブで行われたドイツ人作家パップス Bernt Papenfu の朗読会や、8月末に始まった「ドイツ＝ポーランド文化週間」Die Deutsch-Polnische Kulturtage に足を運んだ。

集めた資料のうち、とりわけ重要と思われるのは、ライプツィヒ大学スラブ学科でポーランド移民文学研究の第一人者であるトレプテ氏 Dr. Hans-Christian Trepte による論文や随筆である。それらは、事前に入手していた氏の出版刊行物のリストをもとに収集した。氏が関心を持っておられる分野は広く、必ずしも亡命・移民文学に限らないが、「創作言語の切り替えとアイデンティティの問題」についての論文がいくつかあり、非常に興味深かった。

また、ポーランド・ドイツ文学に関わらず、「国境によって区切られない文学」「超国家的な文学」というテーマで研究した論文を入手することに力を注いだ。テーマは違っても、自分の研究テーマと共通の視点を持った論文から、学べきものがあると考えたからである。

ベルリンのポーランド・インスティテュートでは、何人かのドイツ在住のポーランド人作家の文学作品や随筆を入手した。その他、ベルリン州政府外国人局では、ベルリン在住のポーランド人の社会・文化活動を報告するパン



フレットを得た。このパンフレットは毎年作り変えられるので、最新の情報を得ることができる。

3. 研究者とのコンタクト

ドイツの研究者とのアポイントメントは渡航前に取れていたため、問題なく訪問することができた。まず、8月上旬ベルリンのフンボルト大学スラブ学科の教授オルショフスキ氏Prof. Dr. Olshowskyを訪ねた。オルショフスキ氏は、私の研究計画書について助言し、さらに、私が2004年度ドイツ学術交流会(DAAD)奨学金を得た場合、指導を引き受けるという約束をして下さった。

ライプツィヒ大学スラブ学科のトロプテ氏は、私の研究テーマに強い関心を示し、私がドイツへ留学できた場合、ライプツィヒ大学のプロジェクト「19・20世紀の中東欧における国民文学と社会変化」へ参加することを勧めて下さった。

ブレーメン大学スラブ学科の教授シュロット氏Prof. Dr. Wolfgang Schlottは、ブレーメン大学スラブ学科で行われているプロジェクト「1990年以降の東欧移民のドイツ語による文学」について話し、私の研究計画についても助言して下さいました。さらに、ブレーメン大学スラブ学科に収められたポーランド亡命文学・地下出版の蔵書を見せて下さった。また、そのプロジェクトに参加しておられる、文学社会学者ウフェルマン氏Dr. Dirk Uffelmannに私を紹介して下さいました。ウフェルマン氏からは、そのプロジェクトについてより

詳しい説明を伺うことができた。

クラクフでは、『亡命地におけるポーランド人作家小事典』Mały Słownik Pisarzy Polskich na Obczyźnieの著者を訪ねたかったが、その希望は叶わなかった。しかし、クラクフで偶然知り合った、ワルシャワ大学史学科の教授ツェギェルスキ氏Tadeusz Cegielskiを通じて、ポーランド人亡命作家であり、ステッティン大学Stettin(Szczecin)スラブ学科の教授シャルガ氏Prof. Dr. Leszek Szarugaとコンタクトがとれた。時間の都合が合わず、シャルガ氏を直接訪ねることはできなかったが、電話とメールで私の研究計画についてのコメントをいただくことができた。

予定していたことでいくつか達成できないこともあったが、全体的には、(滞在期間は、予定よりほぼ2週間も短縮されたにもかかわらず)充実した一ヵ月半だった。ドイツに行ってから、今回の渡航の目的を、資料収集とドイツ人の研究者との接触に絞ったことは、9月末に提出する研究計画を充実させる点において、賢明な判断だったと思う。ドイツ人・ポーランド人合わせて5人の研究者からの助言を通じて、渡航前はまだ漠然としていた今後の研究内容が、かなり具体化した。

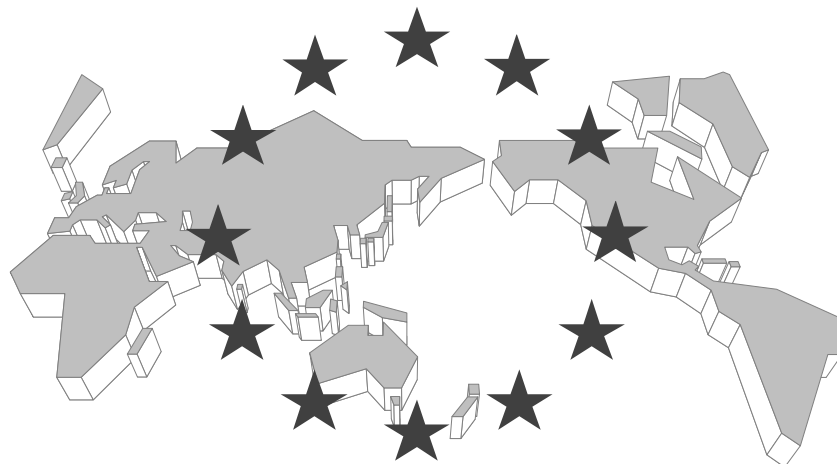
4. おわりに

ポーランドではハプニングが重なって、予定を大幅に変更した。例えば、ワルシャワでは、渡航前に予定していた隔週誌「移民新聞」をコピーするのは断念し、かわりにポーランド亡命文

学研究の動向を調査することに主眼を置いた。というのも、ドイツの研究者の間では、「創作言語の切り替え」という要点が欠かせず、「今日の他民族的なドイツ文学におけるポーランド移民文学」というテーマが注目されるのに対し、ポーランドでは、(ポーランド亡命文学についての研究が膨大な数あるものの、)体制転換後のポーランド移民文学についての研究は非常に乏しく、とくに「創作言語の切り替え」といった問題は全くと言っていいほど注目されていない、という印象を持ったからである。今の段階ではまだ断定はできないが、ポーランドでは、「創作言語の切り替え」は「文学的同化」というネガティブなイメージが強い上、ドイツのポーランド亡命文学は、ポーランド亡命文学全体から見れば末端に過ぎないという認識が優勢であるようだ。だから、私の研究テーマである「1989年以降のドイツにおけるポーランド移民文学」は、ポーランド人研究者を多少なりとも躊躇させてしまうのかもしれない。しかし、実際には、たとえ創作言語をドイツ語に変えても、ポーランドを題材に執筆する作家は多く、必ずしも「同化」という理解はふさわしくない。このテーマで博士論文を書くには、やはりドイツへの留学が不可欠であると感じた。

井上暁子

(大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻博士課程)





エーリッヒ・ザロモンとドイツのジャーナリズム状況に関する研究調査

1. 調査旅行の目的

このたびの調査旅行では、ワイマール時代末期に活躍した近代フォトジャーナリズムの先駆者エーリッヒ・ザロモン(1886-1944)の仕事、および当時のドイツのジャーナリズム状況をテーマとした論文執筆のための資料調査と、何人かの専門家に会い、調査研究のための助言を得ることを目的としていた。

2. 図書館での文献調査

2.1 調査場所

ザロモンの残したオリジナルネガやヴィンテージプリントの調査のため、昨年12月に助成金の交付が決まっていた。各部門の担当者によって回答が異なり、閲覧可能な資料がわからないまま現地入りしたところ、今年秋の移転準備のためザロモン関係の資料はすべてすでに梱包済みで、彼の遺品調査は不可能ということが判明した。この調査はザロモンに関する研究において不可欠であるので、今後、また機会を得て行きたいと考えている。

そこで今回の調査旅行では、国立図書館(Staatsbibliothek, Haus 1: Potsdamer Straße, Haus 2: Unter den Linden, Zeitungsabteilung: Westhafenの3箇所)、およびKulturforumにある

Kunstabibliothekでの資料調査を行った。そこで、ザロモン個人に関する文献と、できるだけ同時代の資料、特に新聞・雑誌にあたって、1920年代から30年代初めにおけるフォトジャーナリズムの状況、写真の使われ方、メディアとしての認知状況、および同時代にドイツで活躍した他のフォトジャーナリストまで、広い範囲を視野に入れて調査した。

2.2 グラフ誌の検討

Berliner Illustrierte Zeitung (以下BIZと省略)をはじめとするグラフ誌については、1920年から33年に刊行されたもので、ベルリンの国立図書館で閲覧可能なものすべてに目を通した。この時期におけるドイツのグラフ誌の発展こそが、近代フォトジャーナリズムの始まりであったという写真史上の通説を確認するのが目的であった。

実際にみってみると、写真のスペースが年を追うごとに増えていること、はじめは関係者の肖像写真ばかりであった写真が、自然な様子を捉えたスナップ的なものへと変わっていったことがわかる。全体に、連載小説のページを除いては、写真ばかりが大きく掲載されており、記事といえるほどのテキストはごくわずかである。写真にタイトルを少し詳しくした程度のわずかなキャプションをつけただけで、まとまったテキストの記事がついていない場合も多かった。写真のすぐ横にあるテキストが、別のトピックのものである場合も多く、総じて大変見づらい体裁であったことが確認できた。

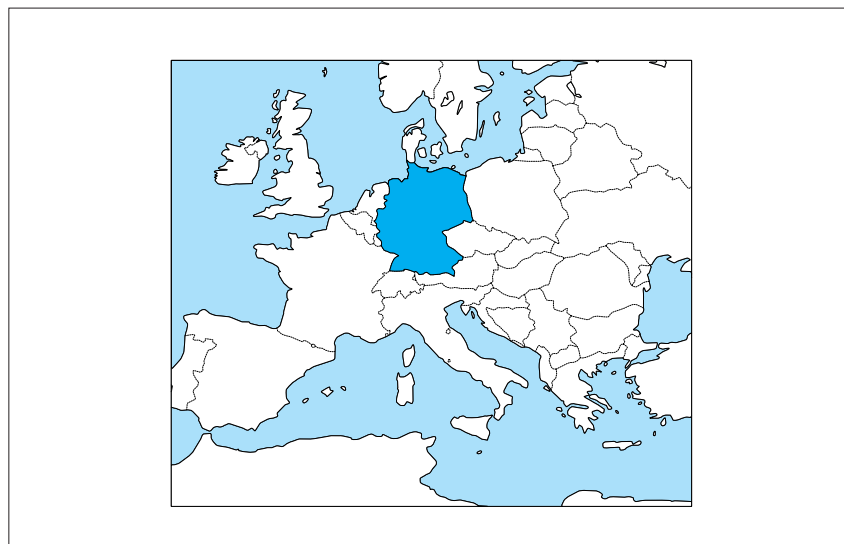
2.3 K.コルフの手記および同時代におけるフォトジャーナリズムに関する文献

BIZを発行していたベルリンの大手出版社ウルシュタインが創立50周年を記念して1927年に出した本に、BIZの編集長クルト・コルフがBIZの歴史を書いた手記は、当時のBIZの特徴を表しているとしてよく引用されるテキストであるが、これを実際のグラフ誌と照合、検討を行った。

それとともに1900年から1933年までの間に出版されたフォトジャーナリズムに関する文献を探索し、検討した。これらは主に、現役のフォトジャーナリストによる、フォトジャーナリストを目指す人への手引書である。したがって技術的な内容が多いのだが、これらの文献から、1925年あたり、すなわちザロモン登場以前に、ザロモンが撮っていたような写真を撮ることが技術的に可能であったこと、そうした写真が求められていたことがわかる。

コルフの手記と、これらの手引書から、1928年にザロモンが法廷での隠し撮り写真によって華々しくデビューする以前にも、彼の撮ったようないわゆる「隠し撮り」写真の需要が、20年代を通じて潜在的にあったことがわかった。

また、グラフ誌には娯楽的要素が強く、時事的・社会的な報道の要素はきわめて少なかったことが改めて確認できた。1928年にザロモンが撮影した国際連盟会議の写真が掲載されるまでは、政治をテーマとした写真はごく小さいものしか掲載されておらず、スポーツやファッションの報道が誌面の中心をなしている。また、政治をテーマとし



た写真が掲載されても、それに関して記事らしい体裁のテキストが付与されていないケースがきわめて多いことが確認できた。

これらのグラフ誌を発行していた編集者達が、1933年以降アメリカに亡命し、伝説的なグラフ誌*Life*などの創立に関わることになるが、20年代の*BIZ*と、それを手本として作られたといわれている後年の*Life*とでは、扱うテーマやレイアウトの質などに大きな開きがあることがわかった。

2.4 一般紙とグラフ誌の報道の比較

さらに、ザロモンの仕事の中でも特に目立っている国際連盟会議やハーグ会議の報道については、比較のためいくつかの一般紙(*BZ am Mittag*, *Deutsche Allgemeine Zeitung*など)も検討した。各紙ごとにも報道の質に差があるものの、週1回発行のグラフ誌に比べ、出来事背景などについて詳しい報道がなされている。また、あまり写真が掲載されない一般紙のなかにも、ザロモンの写真が使われているものが確認できた。

ザロモンについての先行研究のなかに、彼の写真が使われた新聞および雑誌記事のリストがあるが、今回の調査で、当時のグラフ誌、一般紙のなかに、このリストに掲載されていないザロモンによる写真が使われた記事が数多く見つかった。今後、今回の調査に基づいてこのリストを補完していく必要があることがわかった。

2.5 同時代の他のフォトジャーナリスト

フェリックス・マンやティム・ギダールなど、ザロモンと同時代にドイツでフォトジャーナリストとして活躍して

いた人物についての文献も集めた。なかには、ギダールの著書のように、ドイツのフォトジャーナリズムを振り返って第二次大戦後に書かれたものもある。これらの著作もこれから分析する予定である。

2.6 同時代の写真の状況

作品としての完成度の高い写真を集めた年鑑*Das deutsche Lichtbild*を1920年から1933年まで年代順に検討した。また、同時代の広告やデザインを扱った雑誌*Gebrauchsgrafik*にも目を通した。

3. 専門家の助言

まず、指導教官の紹介で、ワイマール時代の教育史を研究しているフンボルト大学のDr. Gerhard Kluchertに面会し、ワイマール時代の社会的・文化的背景について、有益な助言をいただいた。

また、Dr. Kluchertの紹介で、写真を資料として扱った教育史研究をしている、フンボルト大学のDr. Ulrike Mietznerを訪ね、助言をいただく機会を得た。

具体的には、私の研究テーマに役立つであろう比較的新しい文献で、私にとって未知であったものをいくつかご教示いただいた。また、まとまった著作はないものの、ドイツで出版されている写真の専門誌に寄稿している、ワイマール期の報道写真に通じている研究者を教えていただいた。今後、連絡をとって専門的な助言を得ていきたいと考えている。

さらに、ベルリンに限らずドイツ国内の、歴史的な写真を探る際に役立つBildarchivや、写真を専門とした書店、

古書店の情報も得られた。

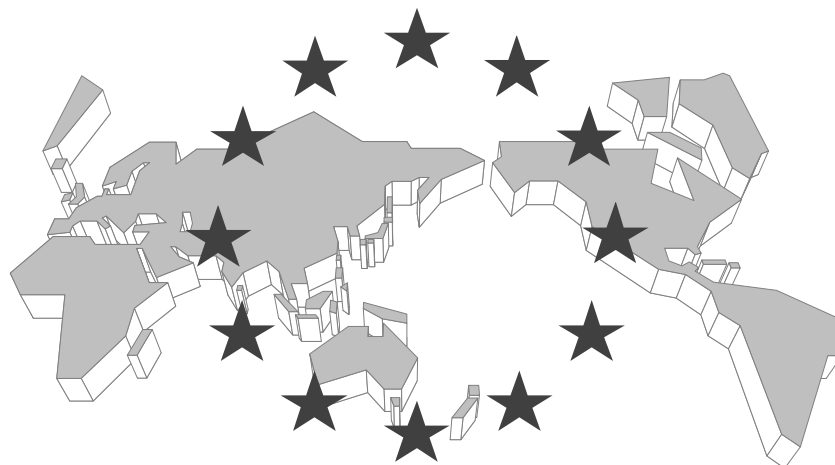
加えて、今回の調査のテーマに直接的な関わりはないものの、現在ドイツでは研究対象としての写真がかなり注目を集めていることを知ることができた。

たとえば、現在ドイツでは、歴史研究の分野で、写真を資料としてどのように扱うか、どのように提示すべきか、という問題について議論が高まっているという話を伺った。また、Dr. Mietznerは子供が被写体となった写真の「解釈」を専門としているので、「解釈」にはさまざまな立場や手法が可能ではないかと質問したところ、図像分析の入門書Marion G. Müller, *Grundlagen der visuellen Kommunikation* (Konstanz 2003)をご教示いただいた。この本は昨年出版されたばかりのもので、さまざまな学問分野における図像分析の可能性を説明したものである。日本では、写真史や写真家についての研究はあっても、その他の分野の研究に写真をどのように使えるのか、という問題はあまり論じられていないように思う。今後、研究のなかで写真を扱っていく上で、こうした方法論的な問題や、写真を扱った研究の状況を考慮に入れていきたいと考えている。

以上、調査旅行で得られた成果を活かし、今後も調査を続けて写真家エーリッヒ・ザロモンと、同時代の写真史およびジャーナリズム状況をめぐる問題を扱ったテーマで、論文を執筆する予定である。

曾我晶子

(大学院総合文化研究科
超域文化科学専攻博士課程)





スロヴァキアでの調査活動を終えて DIGES（社会科学）

0. はじめに

この8月、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究室(DESK)の支援を受けて、スロヴァキアの首都ブラチスラヴァに約一ヶ月間滞在した。スロヴァキアは人口約540万人の小国である。私の研究テーマは、この国が1993年に独立してからの政治の変化を、おもにEUとの関係から説明することである。しかし、日本にいて得られる資料が少ないため、まずはスロヴァキア語の能力をつけることと、スロヴァキア政治を大きく左右してきた過去10年間の選挙に関するデータを集めることが、今回訪問の目的だった。

以下では、語学研修についてはじめに、そして次に、資料収集のために訪問した調査機関、および出国前には計画していなかった元政治家へのインタビューについて報告し、最後に滞在期間全体を振り返って、私の雑感を述べたい。なお、滞在中の活動内容については下表にまとめた。

1. 語学研修

コメンスキー大学で毎年夏季に行われるスロヴァキア語の研修プログラム(SAS : Studia Academica Slovaca)に参加した。今年は30カ国以上から約150人の参加者があった。歓迎レセプションには教育担当大臣が列席しマスコミ

が取材に来るなどスロヴァキア側の関心も高く、語学学習にとどまらない刺激を受けることができた。

授業：

初級者コースに参加した。日曜を除く三週間、毎朝9時から午後3時まで、スロヴァキア語の文法および会話の授業を受けた。文法は基礎的な文法の範囲は概ね修了する程度、会話は日常会話の初歩を学んだ程度である。

SASでは、語学の授業のほかにも、コメンスキー大学の講師によるスロヴァキアの歴史に関する講義や、NGO職員によるEU拡大に関する講義、さらにはスロヴァキアの伝統的なダンスの授業などを受けることができた。また私は参加しなかったが、スロヴァキアの地方都市を観光するツアーもプログラムにあった。

SASを通して、私のスロヴァキア語力は、特に会話面で飛躍的に向上したと思う。しかし、スロヴァキア語の資料を問題なく読めるようになったとはまだ到底言いがたい。今後、独習を続けるつもりである。

施設・スタッフ：

語学研修中は、大学の寮に宿泊した。寮があるのは、ブラチスラヴァの中心街からトラムで30分ほど行った住宅街の中である。授業用の教室も同じ建物の中にあり、食事もここでできる。頗る快適な生活環境だった。

SASの運営に当たっていたのは、20代の教師とボランティアの大学生という若いスタッフたちだった。彼

らと知り合えたことは、今回訪問の大きな成果の一つだと思う。社会主義からの転換を目撃し、スロヴァキアの道を考えなければならない若い世代、そして自分と同年代である彼らとの、つまらない、たまに真剣なおしゃべり、それは「インタビュー」などと呼ぶべきものではないが、受けた刺激はとても大きい。

他の参加者：

私のように研究目的の参加者も決して少なくはなかったが、新鮮だったのは、スロヴァキアに自分のルーツを持つ参加者の多さだ。たとえば私のクラスには、アメリカ人・カナダ人・ノルウェー人・ウクライナ人・イスラエル人・ギリシア人・インド人がいたが、をつけた人たちは両親のいずれかがスロヴァキア系である。この割合は、近隣国からの参加者が多い上級者コースでさらに多くなる。また、「スロヴァキア出身の他民族」にルーツがあるというケースもあり、その中には、二次大戦後スロヴァキアから激減したユダヤ人やドイツ人がいる。今は他の国で生活している彼らが、どんな気持ちでスロヴァキアに来ているのか。そもそも何故スロヴァキアに来たのか。語学研修の雰囲気自体は、若さと明るさに満ちていただけに聞きづらく、それゆえにずっと心に残った疑問であった。

参加者はほぼ全員寮に宿泊していた。そのため、多少のもめごとが起こることもあり、その中でも印象深いものがある。

目的	訪問先	達成事項
語学研修	コメンスキー大学スロヴァキア語研修プログラム (SAS: Studia Academica Slovaca)	三週間の語学研修に参加
資料収集	スロヴァキア政府統計局	選挙関連資料・統計データを入手
	FOCUS (NGO) MVK (NGO)	選挙関連資料を入手 選挙関連資料を入手
	Institute for Public Affairs (NGO) Center for European Politics (NGO) Slovak Foreign Policy Association (NGO)	年次レポート購入 EU拡大について聞き取り EU拡大について聞き取り・発行雑誌購入
インタビュー	Juraj Mihalik氏 (元VPNメンバー)	主にメチアル・HZDSについて聞き取り

選挙調
3つに分

ページで
の投票
ごとの社
ータを入
英語を話せ
と二度も
と建物に
。通常は
入するの
と、英語
スを紹介
れたのは
販売用の
のまま
の打ち込
だが、い
情報に欠
なってし
後質問が
いても返
を感じた。

つのNGO
年までの出
調査結果
ート入手
は2002年選
ているが、
が悪く、英
。結果的
集計後の

その他調査機関：

Institute for Public Affairsはスロヴァキア社会全般に関する詳しいレポートを毎年発行している。この年次レポートと1998年、2002年選挙に関するレポートを入手した。Center for European PoliticsはEU拡大に関する知識の普及を目的としたNGOで、全国の中学校や高校での教育活動等を行っている。スタッフは親切だったが、同NGOはEUからの資金援助を受けているため、EU拡大に関して中立的な議論をすることはできなかった。資金に関しては、ここに限らずスロヴァキアの多くのNGOが西側からの支援を受けており、活動内容にバイアスがかかっていることを計算に入れる必要がある。Slovak Foreign Policy Associationは外交関係の調査・研究を行っており、季刊雑誌を発行している。この雑誌と関連書籍を購入した。

訪問した機関にはスタッフの能力やシステムの整備度合などの差はあったが、スロヴァキアの政治に興味があるというアジア人、しかも女性の訪問者は珍しいためか、総じて親切に接してもらえた。ただし、彼らから聞き出した意見や調査報告には、ある程度の政治的偏向があることは間違いなく、それをどのように処理していくかが今後の課題として残っている。

インタビュー

語学能力の不足と調査不足による失敗を恐れて、今回の訪問では政府関係者等へのインタビューは行わないつもり

でいた。しかし、元VPN（「暴力に反対する公衆」）の一員で、体制変換期に西側との交渉を担当していた人物を紹介していただく機会に恵まれた。インタビューの内容はここでは割愛するが、間近に見たメチアル（元首相）の話など興味深い体験談を聞かせていただけだ。急な話だったため、十分な準備ができなかったことが悔やまれるが、次回以降の訪問でこのようなインタビューの機会を確保するための布石にはなったと思う。

研究対象である政治の当事者から率直な意見を聞き出すことは難しい。自分の研究テーマに関わる聞き取りは、できるだけ多くの人にしたいと考えていたのだが、実際にそうしたチャンスをつまぐ利用できることは稀だった。そこには二つの理由がある。まず、一般的に、知り合って間もない他人に政治的な見解を尋ねることの難しさがあった。政治的な立場はプライバシーの領域であるし、さらに、こちらがそれを研究対象として見ていることが知れば、相手は萎縮してしまう。メチアル政権のように国際的な非難を受けてきた事象に関しては、そのことについて触れることによって、スロヴァキアという国に対してマイナスの先入観を持っていると勘違いされる可能性もある。また第二に、以上のような障害を気にせず話をしてくれる人はそれでもいるのだが、こうした人の多くは既に偏った意見を持っている場合がほとんどで、あまり一般化はできないことがある。

インタビューをとることを目的とする調査をいずれ行いたいと考えているが、相手に応じてそのインタビューをどう位置づけるかをあらかじめ十分検討し、相手の理解を得て臨むことが大切なのだろう。それが今回の教訓となった。

3. スロヴァキア雑感

今から3年前、2000年の秋に、私はブラチスラヴァを訪問したことがある。その時期、スロヴァキア政府はEUとの加盟交渉に必死で対応していたはずだが、私の目に映ったのは、「首都」にしては貧弱すぎるブラチスラヴァの景観と、そこに住む人々のマイペースな暮らしぶりだった。それから3年、EU加盟を控えたスロヴァキア

は、少しずつ変わっていた。街で見かける観光客の姿が増え、文化的資源の修復も進められた。郊外には、外資系の大型スーパーマーケットがいくつもできている。

それでも、変わらないものは変わらない。ブラチスラヴァの旧市街からドナウ川を渡ると、社会主義時代の四角い労働住宅が、ドミノのように今も並んでいる。そこはペトルジャルカと呼ばれる地区で、低所得層が住み、治安も悪い。失業率の高さは、体制転換以降スロヴァキアが悩み続けている問題だ。さらに、一つ。1993年の独立の際に、一般的なスロヴァキア人がどのような態度をとったか、ということのスロヴァキア人自身が説明するときによく使う、こんな話がある。「テレビでは独立を祝って街頭でダンスするブラチスラヴァ市民が何度も映されていたけど、そんな人はここでは見なかった。きっと、本当に少数の人たちの同じ映像を何度も流していたに違いない。」チェコスロヴァキアの解体は、レファレンダムなどの手続きはなく、両共和国の代表者間交渉で決定した。「ピロードのような離婚」と言われる所のだが、一国の独立がそのような無関心の中で決められていったのは何故なのか。同じようなことは、その後スロヴァキアに成立した権威的なメチアル政権に対する姿勢にも、EU加盟問題に関しても言える。政治的無関心は、スロヴァキアに限った話ではない。しかし、だからこそ、この国の政治について考えるときは、次のような問いから始めなければならないだろう。「この国に『政治』はあるのか？」それは四角い住宅同様に、変わらないスロヴァキアの一側面なのかもしれないし、そうではないかもしれない。

スロヴァキアに関する私の研究は、実際に現地に行ってみたあとの以上のような雑感を踏まえたものでなければならぬと思う。

4. おわりに

ブラチスラヴァ城は通称「逆さテーブル」という。その由来は説明するまでもない、ひっくり返したテーブルのような外観を見ていただければ分かる。さて、日本の友人にその「逆さテーブル」というのは愛称なのか、それとも蔑称なのか、と聞かれて困った。

滞在中、方々で聞いてみたがはっきりしない。

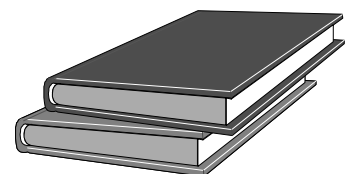
はっきりしないことは他にもたくさんあった。現地に行ってみなければ分からなかったことはたくさんあるが、現地に行ったからこそ分からなくなったことの方が多い。けれども、分からなくなったことを嘔みしめるなかに、大きな喜びを感じている。

そこに暮らしている人がいる現実が、いかに複雑にできあがっているか。その複雑さの中から、どのようにして言葉を紡いでいくのか。そういう試みこそが社会科学の存在意義であり、醍醐味ではないだろうか。もっとも、「言葉を紡ぐ」作業の重さが、これから私にのしかかってくるのかもしれない。今の私にとりあえず言えることは、「逆さテーブル」ブラチスラヴァ城を見て「あれはハンガリーとハブスブルクによる支配の象徴だから、蔑称だ」などというはっきりした答えは、迂闊には出さないほうがいい、ということぐらいだろう。

最後に、このような機会を提供してくださった東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究室と、現地でお世話になったすべての人に感謝の意を表して、この報告を終わりたい。ありがとうございました。

竇槻和子

(大学院法学政治学研究所修士課程)





セルビア語語学研修と資料収集、 ベオグラードにて DIGES (社会科学)

1. はじめに

8月28日から9月28日に渡る期間において、DIGES (社会科学)の助成金の下、主にセルビア・モンテネグロの主要都市ベオグラードに滞在しながら現地調査を行った。研修内容はセルビア語の語学研修とベオグラードでの資料収集という大まかに2つである。1ヶ月に及ぶ現地調査は、率直に言って修士論文執筆および自分の研究にとって大変有意義であり、その経験によって研究の方向性や充実度は大きく進んだと感じている。具体的には以下の報告を参照して頂くとして、まず渡航前に立案した現地調査の目的および計画についてごく簡単に記しておきたい。

修士論文執筆を念頭に置いた私の研究テーマは1990年代初頭の旧ユーゴスラヴィア解体とそれに伴う内戦の諸事象を、しばしばなされる「民族問題」のような必然論や決定論の観点からではなく、ユーゴスラヴィアという枠組みの中で再検証することである。しばしば政治的な側面に偏りがちな国家解体という事象を、現地に実際に住む人々の日常的な生活や文化から捉え直すことを中心に据えながら、特に旧ユーゴスラヴィアで盛んであったロック・ミュージックに注目する。しかし、このテーマの研究を日本国内で進めることにはいくつかの障害があった。現地語のセルビア・クロアチア語の資料や文献を日本で入手することは難しく、現地の図書館や本屋に足を運ばねばならない。また、自らのテーマが人々の日常や文化というそこに住む人々の視点に接近する意図を持つため、一度は現地を訪れる必要性を感じていた(旧ユーゴを訪れたことは一度もなかった)。そして、セルビア・クロアチア語の学習を4月から始めたが、日本では様々な面で語学学習の素材が乏しく、出来るだけ早い語学学習のためには現地での語学研修に参加することが一番の近道であった。さらには、来年春に計画している修士論文執筆前の最も重要な資料収集への布石となる

よう、現地での図書館などの学術機関の実際状況を知り、その利用方法を確立する必要があった。

以上の理由から、3週間のセルビア語の語学研修への参加及びその期間を利用したベオグラードでの修士論文執筆のための資料収集を計画し、現地調査を実行した。尚、語学研修の詳細な日程や内容が渡航直前に判明したために、実際の調査と渡航前に提出した計画書が若干異なったことを最初に断っておくとともに、心からお詫び申し上げたい。

2. 語学研修

8月28日に成田を発ってスイスのチューリッヒを経由した後、同日オーストリアのウィーンに到着した。日本からベオグラードへの直行便はなくヨーロッパの近隣主要都市を経由するのが一般的であるが、今回は陸路を選んだ。ウィーンからハンガリーを縦断してベオグラードへさらに南下する、約10時間を所要する国際鉄道である。語学研修が始まる前日の30日にベオグラードに入ることに決め、それまでウィーンに観光目的で滞在した。

1990年代頃までセルビア・クロアチア語と呼ばれたこの地域の言葉も、ユーゴ解体を経た現在ではセルビア語、クロアチア語と別の言葉として呼ばれる(両者の間にほとんど大差はないのだが)。今回参加した語学研修も、ベオグラード大学言語学部の一組織であるMSC-Medunarodni Slavistički Centar(国際スラヴセンター)が毎年開催している「Skup Slavista-Seminar Srpskog Jezika, Književnosti i Kulture(スクプ・スラヴィスタ セルビアの言語、文学、文化のセミナー)」であり、「セルビア語」であった。今年は主にヨーロッパ出身者から成る総勢約50人が参加し、セルビア語とセルビア文学の2つのコースが用意され、私は前者を選んだ。8月31日から9月20日までの延べ3週間、大学側が用意したホテルに常時滞在しながら、大学での語学の授業および講義、博物館への訪問、日帰りのエクスカージョンなどを行った。参加費には、宿泊費、授業料ほか、3食の食費、博物館の見物料などといった全ての費用が含まれている。ここで、その中身に触れておくと、日程は平日、土曜日、日曜日に基本的に分かれており、3週間休み無くプログラ

ムが組まれていた。平日は9時 - 11時までがセルビア語やその文学に関する一般の講義2つ、11 - 13時までがセルビア語の授業(文法)、13 - 14時までが諸々の博物館の見学となる。昼食の後、17時から18時までが再びセルビア語の授業(会話)、18 - 19時までがセルビアの歌と踊りの授業(最初の2週間のみ)となる。土曜日は14時までで2つの語学の授業を終えると残りは自由時間、日曜日は日帰りの遠足が催された。以上が主な流れであるが、その他平日にエクスカージョンが組み込まれることもあった。

ベオグラード大学言語学部は、学生広場前のウズン・ミルコヴァ通りを挟んで真向かいに位置する。通りは車も頻繁に行き交うバス通りでもあるが、信号機がなく横断歩道を渡るのに非常に苦勞する。授業初日、まずはセルビア語のクラス分けテストに遭遇した。4ヶ月間のみ頼りない語学力に途方に暮れながら、下から2番目のクラスに編入された。私のクラスはアレクサンドラ・ヴラネシュ教授に担当して頂いた。先生は授業中毎回テキストやプリントを使いながら、読み、書く、聞く、話すという4つを網羅的に展開していく。自分にとって非常に有意義であったのは、何よりもセルビア語の素材が豊富であり、語彙力を始めとしてセルビア語に慣れるという体験ができたことであった。特に毎回セルビア語を読むことに力点が置かれていた点は、セルビア語の資料を今後読み進める作業に大いに有益であり、また幸運でもあった。そして、大変興味深かったのは、歌と踊りの授業である。専門の講師の方による指導とアコーディオンの伴奏の中、参加者全員でセルビア民謡を歌いながら、輪になってセルビアの民族舞踊である「コロ(kolo)」を踊るのである。夜ホテルでは、部屋のどこからか同僚がこの民謡を口ずさむ声がしばしば聞こえていた。一方、博物館見学はベオグラード市内の国立博物館、教育博物館、民俗博物館などに足を運んだ。エクスカージョンについては、ベオグラードから日帰り往復可能な諸都市を巡り、9月4日にヴァリエヴォとヴランコヴィナ、7日にマナツィヤとラヴァニツァ、14日にトゥルシッチを訪れた。いずれの都市にもセルビア正教会の有名な教会があり、その観光が目的であったが、トゥルシッチ

では18世紀にセルビア語を確立しセルビア語の父と崇められるヴク・カラジッチの生誕記念祝賀式に参加した。カラジッチの生家があることで有名なこの町には、セルビア国内から老若男女が集まり（特に同じように遠足で来た小中学生が多い）、式典会場の周囲には多くの露店が立ち並び、たくさんの人で賑わっていた。日本で言えば、京都や奈良の古い寺院の記念式典に全国各地から人が集まるといったところだろうか。

9月20日、参加者全員が終了証を受け取る形で語学研修は幕を閉じた。研修を総括するならば、研究者のための短期研修というよりむしろ、多くの人にセルビアの文化を知ってもらい、セルビアという国を楽しんでもらうという類のものであったと言える。だが、語学の授業は自身の語学力にとって少くない成果をもたらし、またそれ以外の日程の中で流れる時間も、この地域の歴史や文化を研究する上でこの上ない貴重な示唆を提供してくれたと感じている。

3. 資料収集

未だ建設中の聖サヴァ教会の眼前に、18世紀に第1次セルビア蜂起を指揮したカラジョルジェの銅像が唯ひっそりとそびえ立っている。何もない。というのも同じくセルビア国立図書館(Biblioteka Srpske)が工事現場に立寄る。建物だけは健在だが、資料収集の主たる場はベオグラードの Svetozar

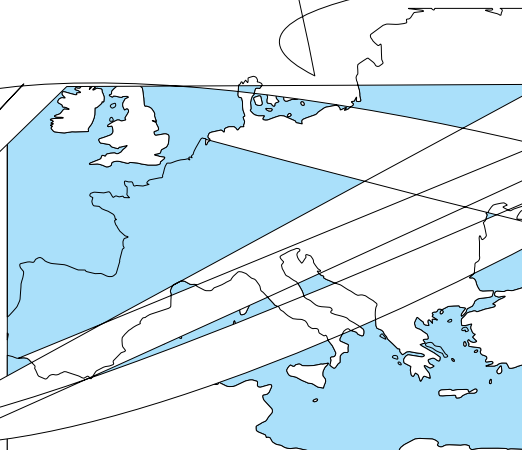
(Univerzitetska Biblioteka“ Svetozar”)、ベオグラードから北にバスで2時間の都市ノヴィ・サドにあるマティツェ・スルプスケ図書館(Biblioteka Matice Srpske)を利用した。渡航前の計画書では、語学研修が平日は午前中のみで土日も一日中自由という話だったため、その空き時間を利用しての資料収集を企画していた。しかし、実際の研修のプログラムは非常に密度が濃く毎日行事が詰まっていたため、大幅に当初の計画を変更せざる得なくなった。よって、比較的空き時間の多かった語学研修第3週目に加えて、研修終了後から帰国限度のぎりぎりまでベオグラード滞在を延長して資料収集を行った。

上に挙げた3つの図書館、そしておそらくセルビア国内のどの図書館もそうであろうが、所蔵文献はすべて閉架にあり、日本のように開架で自由に閲覧することができない。自分の調査不足であったとはいえ、これが最初の難点であった。すべては図書館の利用カードを作成するところから始まる。セルビア国立図書館、マティツェ・スルプスケ図書館はパスポート、もしくはそのコピーを提示し、規定の料金を支払えばその場で会員になることができ、マティツェ・スルプスケ図書館は Svetozar・マルコヴィチ大図書館は大学付属の機関ということになる。パスポート以外の書類が必要で、指導教官である柴宜弘先生からは十分でなく、現地ベオグラードの学生であるという証明書の提出と指導教官の紹介状を提出し、セルビア語のクラスのヴク・カラジッチ先生を言って紹介状を

書いて頂き、日を改めて会員の手続きを済ませた。

入り口付近のカウンターで読書室の座席番号を受け取り、閲覧を希望する図書の申請書を書いて提出し、読書室でしばらく待つ。1時間以内には申請した文献が手に入り、それを読みながら必要箇所は随時コピーを取る。そしてまたさらに本が必要になれば申請書を提出しに行く。この一連の作業を、空いた時間があればそれぞれの図書館で繰り返した。コピーに関してはどの図書館も申請式でコピー係が複写してくれるが、国立図書館では係のお兄さんが私の膨大な量を見ると、「自分でやって」ということになった。

大学図書館はコピー代金が比較的安価なものの学生で読書室が常に満席のため、国立図書館を主たる活動の場とするようになった。座席数も多く2階まで吹き抜けとなったホールのような読書室はとても広々として、落ち着いた環境を与えてくれる。事前に作成した文献リストを元に、一冊一冊閲覧していく。自身のテーマに関する旧ユーゴ解体関係の本が中心であったが、中でも全てをコピーしたイネス・ブリツァとドラギチェヴィチ=シェシッチのサブカルチャーやオルタナティブ文化を扱った2冊の文献は大変貴重であった。限られた時間と慣れない図書館のシステムに戸惑いながらも、作成した文献リストの全てをなんとか調査し終えることができた。また、各図書館に設置されているパソコンの検索機は日本のNACSIS-Webcat以上に優れていた。著者名・タイトルでの通常検索の他に論文集所収、または研究雑誌所収



の論文までも著者名から検索することが可能で、資料の幅が広がると同時に自身のテーマに関わる現地の研究状況を詳細に把握することもできた。さらに、ベオグラード最終日は文献リストの調査もひと段落して時間に余裕もあったので、1990年に創刊された雑誌「Vreme」の閲覧を創刊号から半年ほど行った。

『「Pop Rock」はここにはないわ。』『どこにあるんですか?』『ノヴィ・サドよ。』そう国立図書館で告げられた時、ノヴィ・サドへ出向くことは決まっていたようだ。「Pop Rock」は、今回の渡航において必須の文献のひとつと計画していたもので、1980年代の旧ユーゴスラヴィア全土のロック・ミュージック・シーンを網羅する最も有名な雑誌である。語学研修が終了した2日後の22日、一路ノヴィ・サドへ向かった。目指すはマティツェ・スルプスケ図書館である。だが、その文献に出会うにはもう一日必要であった。というのも「Pop Rock」はマティツェ・スルプスケの別の書庫に保管されており、入手には一日を要するという。翌日再び図書館に足を運んだが、用意されていたのは前日申請した3年分(1988-90)ではなく、88年の1年分であった。海外での資料収集の難しさを痛感しながらも、規定では雑誌のコピーは3冊までのところを、司書の方のご好意により1年分の12冊全てコピーすることができた。改めて感謝するとともに、次回への宿題が残った2日間となった。

さて、旧ユーゴの事象とその解体を研究するには、毎年出版されていく文献も必要不可欠である。どの研究分野においても最新の研究を把握することは必要であろうが、殊に現代史という視点で考えるならその意義は計り知れない。セルビアでは出版部数の限りもあって、およそ10年以前に出版された文献を街中の本屋で入手するのはほとんど不可能であるので、図書館で閲覧するかコピーをするしかない。そのために各図書館に足を運んだのだが、最近の出版物については街中の本屋で購入可能であった。

ここ数年で、旧ユーゴ解体を扱った優れた文献はかなり多く出版されてきている。歴史的に考えても、解体から約10年を経た現在、ようやく冷静な距離を置いた民族主義や政治的側面に偏

らない研究が展開されているのだろう。90年代末頃ではその類の英語の文献が質・量共にかなり豊富に出版されていた。だが今日、ミロシェヴィチ政権が崩壊し民主化の道を歩み始めたこともあり、セルビアにおいても同様な環境が現れ始めているようだ。ベオグラード市内の本屋では、そのテーマを扱った多くの興味深いセルビア語の文献が軒先を連ねていた。特にSamizdat B92という出版社は、自分のテーマに関わる示唆的な書物を海外のセルビア語訳を含めて続々とシリーズで刊行していた。ほぼ毎日市内の本屋を渡り歩き、必要な文献を幾つか購入した。ベオグラード大学言語学部のすぐ近くにあるPLATOという本屋は品揃えもかなり豊富で、掘り出し物も幾つか見つけることができた。

以上のようなベオグラードでの初めての資料収集は、日本国内とは異なるシステムに戸惑い、計画通りに進まないこともあったが、全体としては修論に向けた基礎的な文献を入手でき、実り多いものであった。何よりも現地での資料収集のノウハウを身に付けられたことが、次回以降の現地調査を見据えた上でも有益であったと言える。

4. 終わりに、そして修士論文に向けて

9月28日、これまで述べたような成果を携えて成田空港に降り立った。振り返れば、重点的に述べてきた語学研修と資料収集以外にも、自分の研究への一助あるいはヒントとなる経験を今回の渡航は数多く残してくれた。実際に住んだのではなく旅行者のホテル暮らしという限定は付くが、街を散策する、レストランで食事をする、テレビを見る、買い物をする、会話する、大学に通う、等の何気ない時間も、現地の人々の生活や日常の一部を垣間見ることのできる貴重な体験であった。特に、マラカナン・スタジアムで観戦したサッカー欧州選手権予選のセルビア・モンテネグロ対イタリアの試合での、人々の異様なまでの盛り上がりは忘れられない。また、カフェや飲み屋など色々な空間で耳にした音楽から、この地域がロック・ミュージック色の比較的強い場所であるという確信も得ることができた。もちろん研究テーマの時代区分は1990年代以前であり、こうした経験を簡単に結びつけることはできないが、どんな形であろうと今後

の研究に役立てたい。

帰国後数週間が経ち、まだ資料の読み込みはそれ程進んでいないが、現在までの結果と現地での成果から、修士論文のテーマを以下のように絞り込むことができた。全体としての視点に変わりはないものの、1980年代から90年代初頭の旧ユーゴスラヴィア解体までの時代において、セルビアを中心としながら人々の日常生活や文化が当時の政治、社会、そして解体とどのように交差していたかを歴史的に考察する。これまでミロシェヴィチやナショナリスト的な側面を強調して語られることが比較的多かった、80年代以後のセルビアであるが、その内部において人々の生活、民族意識、文化とサブカルチャー、そしてユーゴスラヴィア意識がいかなる変遷を辿ったのか。現時点では特に、ミロシェヴィチ政権が民族的な象徴として農村文化に依拠していく中で生みだされる、従来盛んであったロック文化やベオグラードを始めとする都市文化と、民族音楽や農村的なものとの対抗関係に注目している。これらを出発点として、さらに文献を洗い出していくのを絞り込み、現地での資料収集も考慮に入れつつ修士論文執筆に向けた準備を着実に進めていく所存である。

以上が現地調査で得られた主な成果である。これらを今後、研究テーマ及び今後の資料収集、そして修士論文に十分に活用していきたいと思う。最後に、今回の渡航に関して私がお世話になったすべての方に感謝の意を申し上げたい。また、何よりもこのような恵まれた機会を得ることができたのも、DESKのDIGES(社会科学)助成金ゆえである。心からの感謝をここに記したい。

鈴木健太

(大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻修士課程)



DESKからのお知らせ

着任挨拶

ヨーロッパ統合の歴史研究：
「ヨーロッパ」とは何か？
自己紹介にかえて

「ヨーロッパ統合は国民国家を超える」。第二次世界大戦後、ファシズムの克服、冷戦の狭間で誕生したヨーロッパ統合は、国民国家の弊害、そして悪しきナショナリズムを克服する新たな国際関係の実験として注目を集めてきた。なぜヨーロッパ人は、幾多の挫折を繰り返しながら、「ヨーロッパ」にこだわるのか？いかなる「ヨーロッパ」を構築しようとしているのか？先進国として、同じく豊かさを享受しながらも、戦後、アジアの近隣諸国よりも、むしろアメリカを（「のみ」と言っても過言ではあるまい）見つめつけてきた日本の戦後と比較して、「ヨーロッパ」へのかたくななこだわりとは何か、FTAの可能性が本格的に議論されている段階において、その成立プロセス、そしてその意義をめぐる研究は今日の要請でもあろう。

EU研究においても、現状分析にとどまらず、80年代以降の欧州諸国での外交文書の公開に伴い、一挙に実証的な歴史研究がスタートしている。そして近年は、ヨーロッパのみならず、日本においても、外交史に加え、経済史、政治史、社会史、さらに歴史的分析をも得意とする比較政治の参入というように、その動きには目覚ましいものがある。これらの多方面からの研究の進展により、狭義の統合史のプロセス・制度の形成のみならず、その理念、ヨーロッパの存在意義、独自性が問われている。戦後ヨーロッパの再解釈が試みられているといっても過言ではなからう。

例えば、国際政治・外交史を中心とする統合史では、EC/EUの制度構築のプロセスに加え、特に戦後の冷戦との関連から米欧関係とヨーロッパ国際関係における統合の役割が明らかにされつつある。例えば欧州統合史研究会（代表・遠藤乾）では、これらの研究の蓄積を基礎として『原典・欧州統合史史料集（仮称）』の刊行準備がすすめら

れている。

また経済史では、戦後復興期から高度経済成長期にかけての経済統合の詳細なプロセスが明らかにされつつある。ヨーロッパ統合は、様々な可能性が議論されながらも、結局は経済統合から出発したため、その研究の重要性は改めて指摘するまでもない。加えて、戦後の経済統合政策が、外交政策として国内の政治・経済政策から分離していたのではなく、むしろ、戦後復興政策との密接な連動、さらに国際経済体制との関連等、ヨーロッパレベルの分析にとどまらず、国内、国際レベルの分析との関連等極めて興味深い。今後、高度経済成長、オイルショック後の長期不況、グローバリゼーションとの関連等、その研究の進展が期待される。また、近年、ヨーロッパ統合の社会史についても分析が着手されている（廣田功・森建資編著『戦後再建期のヨーロッパ経済』日本経済評論社、1998年および永岑三千輝・廣田功編著『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社、2004年。）

一方、国家・社会関係を中心に分析していた比較政治学が、ヨーロッパを視野に入れ始めたことは、90年代以降のEU研究の「事件」であった。これまで同じ地域研究ながら相互に無関心のまま接点の多くはなかった両者であるが、EUの深化に伴い、国内の様々なイシューも、EU抜きで語ることはできなくなっている現状の反映であろう。とりわけ「ガバナンス論」の流行とともに、ナショナルなレベルとヨーロッパが層をなす、「ヨーロピアンガバナンス」に議論は及んでいる。まさに、ヨーロッパの国際関係レベルではなく、むしろ「国民国家」の内部において、ヨーロッパ統合により「国民国家」が変容を余儀なくされ、重層的な権力構造へと脱皮する過程が明らかにされていることに、ヨーロッパの政治経済社会の変質を窺い知ることができよう（例えば、比較政治学会年報第5号『EUのなかの国民国家 - デモクラシーの変容』2003年）

そして、長らく国民国家論が隆盛を極めていた西洋史においても、ヨーロッパという枠組みにより、新たな解釈が試みられつつある。近代以降の、国民国家の生成において統合・封印されてきた、非ナショナルなアクター、領域、アイデンティティが、再び掘り起こさ



れようとしている。（例えば、谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、2003年）

このように、自らの研究のみに没頭する「タコソボ化」「断片化」ではなく、むしろ各領域において、共同研究を核として、独自の問題意識、問題設定のもとで、良い意味での共同研究が進められていると思われるのである。しかしながら、これらの研究の進展にもかかわらず、相互の連携を欠くため、統合的なヨーロッパ研究が成立したとは言いがたい状況である。これらの研究が、一種の「ミリュー」の並列と化し、「ミリュー」内部では、問題意識を共有しあい、極めて緊密な共同研究が進められてはいるものの、「ミリュー」間では相互の関係を欠いているともいえる。いわば、統合研究の「列柱社会」とでもいうべきであろうか。

そこで、現在DESKでは、こうしたヨーロッパ研究のさらなる展開を目指して、「現代ヨーロッパフォーラム（仮称）」の立ち上げを準備している。学際性が要求されるEU研究において、これらの各領域が相互に議論しあう共同研究の場がまさに必要とされていると考えるからである。大学・専門を超えたヨーロッパ研究のネットワーク形成、相互の交流を促し、新たな起爆剤となることを目指したいと考えている。ぜひ従来の枠にとらわれない、自由な交流、議論を期待する次第である。

冒頭の問題に戻ると、確かに、関税同盟から通貨、パスポート、歌・旗等の様々なシンボル等、EUの採ってきた多くの政策は、国民国家形成の常套手段の多くを踏襲している。しかしながら、国民国家の克服・消滅が語られながらも、実際には、多くの研究が明ら

かにするように、戦後多くの西欧諸国において、福祉国家と介入主義的な経済政策等に伴い、中央集権制ないしは国家の権限はさらに肥大化している。近年の統合史研究では、むしろ「ヨーロッパ統合は国民国家を救済する」というミルワードテーゼにあるように、両者はポジティブ・サムの関係で把握されている。そこに出現しているのは、国民国家とEUとが互いに不可分な一体性を構成する、ヨーロッパ特有の重層的な権力空間である。国民国家の上位にEUが位置するのみならず、下位のサブナショナルな空間においても、むしろ国民国家形成の中で封じ込められてきた様々な主体・単位が再浮上しているのである。まさしくウエストファリア条約による主権国家体制以来の大転換であるといえよう。

では、この再度の「ヨーロッパの誕生」は、中世ヨーロッパの再生なのか？答えはおそらく「否」であろう。EC/EUを通じて、彼らが実現しようとしてきたものは、単なる制度としての統合ではない。挫折を繰り返しながらも、統合にこだわるモメンタムとは何だったのであるか。単なる経済的繁栄の追求に過ぎないのであるか。米ソのヘゲモニーの間で、昔日の影響力を喪失したヨーロッパの意義はどこに存在するのか？戦後復興から高度経済成長、そしてグローバリゼーションの時代において、アメリカモデルとは異なるヨーロッパモデルは存立しえるのか？それはいかなるものなのか？そもそもヨーロッパとは何なのか？ヨーロッパ統合とは、まさしくヨーロッパ人の「自己」についての不断の問いかけの中から生まれてきたといえよう。いわば、ヨーロッパという「自己」は、ファシズムの克服、共産主義との対峙、そして暗示的ながらも明確なアメリカとの差異化、といった「他者」の否定の中から育まれてきた。

冷戦の中で、アメリカの安全保障に依存しながら、ファシズム・共産主義の否定として、議会主義、法の支配、自由、人権の尊重といった民主主義は、ヨーロッパ統合に参加するに不可欠の条件と位置付けられた。もちろん、これらの条件はアメリカとも共有するところである。しかし、ヨーロッパは、自由競争や市場万能主義とは異なる、経済秩序、福祉国家、独自の人権・環

境基準等、明らかにアメリカと異なる政治・経済・社会秩序を追求してきた。そしてEC/EUは、全てではないにしても、こうした理想像の具体化・制度化を担ってきたのである。

東アジアにおいても、FTAの形成が議論される今日、関税同盟や制度のみにとどまらず、地域統合の様々な可能性、独自の理念を考察する必要があるのではないだろうか。もちろん、ヨーロッパ統合を唯一のモデルとして神聖視する必要はない。しかし単なる国益を補完する制度にとどまらず、未来志向の地域協力・地域共同体を目指すのであれば、アメリカとも異なる、ヨーロッパ的な様々な「価値」「理想」を体現する共同体として、ヨーロッパ統合の歩みを今一度見つめなおすことが必要なのではないだろうかと考えられるのである。

上原良子
(フェリス女学院大学、
DESK客員助教授)

自己紹介

文科 類の1年生として初めて駒場に足を踏み入れたときから、この春でちょうど12年目になります。その間、学部3年生で当時は教養学科第二(ドイツの文化と社会)と呼ばれていた現在の地域文化研究学科に進学し、大学院も総合文化研究科地域文化研究専攻で修士課程、博士課程を終えました。もちろん、大学院在籍中には本郷の西洋史のゼミに参加し、専修大学、独協大学などの大学院ゼミにも顔を出し、他大学の仲間たちと勉強会を組織し、ドイツに留学もしましたが、自分の帰るべき場所としていつも駒場があったからこそ、様々なところに自由に出ていくことができたということがあったと思います。

私はこれまで駒場の自由な空気の中で、地域研究の視点を取り入れつつドイツ現代史を勉強してきました。博士論文で扱ったのは、第二次世界大戦後に東欧諸国やドイツ旧東部領から強制移住させられた1000万人を超えるドイツ系住民(被追放民)が戦後ドイツでどのように統合されていったかという問題です。とくに、歴史的に関わりの

深い東部地域を戦後処理の中で強制的に割譲させられ、住民も暴力的に強制移住させられたという経験が、第二次世界大戦をめぐる戦後ドイツの歴史認識にどのような影響を与えたかに着目して研究を進めました。私は戦後ドイツが第二次世界大戦の過去とどのように向き合ってきたかという問題に歴史認識という観点から取り組んできました。今は戦後ドイツの歴史教育の変遷とその社会的政治的要因について研究しています。昨年、地域文化研究学科で演習を担当した際にもこのテーマを取り上げました。

学生時代のほぼすべてを駒場で過ごし、研究・教育生活の第一歩も駒場で踏み出すことになった私にとって、DESKは学生時代から親しみをもってきた研究室のひとつです。これまで、国際シンポジウム、現代史フォーラム、社会科学部門研究コロキウムなどDESKの様々な企画に参加し、『ヨーロッパ研究』やチュートリアルでは研究発表の場も与えられてきました。昨年6月にDAAD(ドイツ学術交流会)の会議で博士論文の成果報告を行う機会にめぐまれたのもDESKの推薦によるものでした。

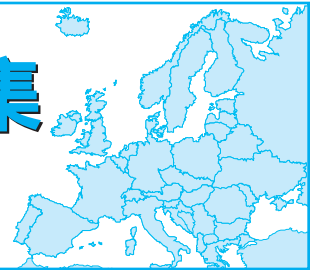
発足から3年半を経て、学生に対するDESKの援助はますます充実してきているように思われます。自分自身、これまで学生としてDESKと接してきた経験をもとに、DESKが学生の皆さんにとってより意義のある研究室となっていけるよう、またより親しみのある研究室となっていけるよう、私なりの手伝いができればと願っています。どうぞよろしく願いいたします。

川喜田敦子
(DESK助手)



DESK『ヨーロッパ研究』
(European Studies)

第四回論文募集



DESKプログラムの研究紀要『ヨーロッパ研究』(European Studies)の第4号に掲載する論文を以下の要領で募集します。

『ヨーロッパ研究』募集要領

1. 執筆資格
 - 1) 東京大学大学院総合文化研究科に籍を置く大学院生ならびに教官。
 - 2) 1)の規定にも拘らず、DESK紀要審査委員会が適当と認めたる者。
2. 執筆の申し込み
 - 1) 投稿希望者は2004年7月30日(金)までに8号館1階のDESK事務室まで申し込むこと。
 - 2) 申し込む場合には、所属、氏名、住所(或いは連絡先)、電話番号(Fax番号、或いはe-mailのアドレスも含む)、論文の題、使用言語、論文のおよその長さを明記すること。
3. 論文の提出
 - 1) ワープロ等を使用し、印字した論文原稿と要旨を各三部、及び論文とレジュメを入力したフロッピー・ディスクをDESK事務室に提出すること。尚、ディスクには使用したワープロ・ソフトの名を忘れずに記入すること。
 - 2) 論文の表紙には、所属、指導教官名、氏名、住所、電話番号、e-mailのアドレスを明記すること。
 - 3) 締め切りは2004年9月24日(金)
 - 4) 提出場所は8号館一階DESK事務室
4. 執筆論文の条件
 - 1) 未発表のものに限る。
 - 2) 主題は、ドイツ・ヨーロッパ地域の政治、経済、社会、歴史、文化、言語等に関するもの。
 - 3) 使用言語は、日本語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、またはスペイン語とする。
 - 4) 論文には必ず要旨を付ける。要旨は論文が日本語の場合には上記のヨーロッパ言語で、論文が上記のヨーロッパ言語の場合には日本語で書くものとする。
 - 5) 論文の長さはレジュメも含めて、日本語の場合400字詰め原稿用紙で換算して70枚以内、欧文の場合には一行80ストロークで換算して700行以内を目安とする。ワープロ等で執筆の場合は、字数が上記の範囲内であればよく、必ずしも原稿用紙に印刷したり、欧文の場合一行80ストロークで書く必要はない。紙の大きさはA4とする。
 - 6) 論文要旨は、邦文欧文ともに印刷してほぼ2頁以内となるようにする。これについては既刊の『ヨーロッパ研究』を参照のこと。
 - 7) 尚、欧文で執筆する本文並びにレジュメは必ず然るべき native speaker の校閲を経ること。これまでの投稿された欧文のレジュメには特に誤りの多いものが目立つ。然るべき native speaker とは内容に一定の理解をもち、活字論文を多数執筆した経験を持つ外国人教師のような方々を指す。留学生によるチェックには誤りが多すぎるので避けること。欧文の論文並びにレジュメの末尾に校閲者の名前と身分を記すこと。
 - 8) 12月中旬から2月上旬にかけて校正を行う必要があるため、その時期に日本国内が郵便事情の良い国あるいは地域にいること。郵便事情が良いとは、一週間以内に航空便が届くことを意味する。その時期に郵便事情の良い国や地域に出かける予定のある人は応募を差し控えて下さい。
5. 論文審査
 - 1) 論文の採否はDESK紀要審査委員会が決定し、審査結果は速やかに連絡する。
 - 2) 審査委員会が審査の結果、書き直しを求める場合がある。
 - 3) 諸般の事情により論文の圧縮を求めたり、あるいは二回に分けて掲載すること等を条件に採用することもあり得る。

DESKの催事情報については、ホームページ
(<http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/What's-new.html>)をご覧ください。

今後の催事情報をいち早くメール送信いたします。ご希望の方はメールでDESK事務室(desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp)までお申し込みください。

DESK事務室
 開室日：月曜～金曜（祝日除く）
 住所：〒153-8902
 東京都目黒区駒場3-8-1
 東京大学大学院
 総合文化研究科・教養学部
 8号館1階109号室
 Homepage:
<http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp>
 E-mail:
desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp
 Telephone & Fax:
 03-5454-6112